『人文学報』第 115 号（2020 年 6 月）
（京都大学人文科学研究所）

# 祭式歌詠と思想

## ―最初のウパニシャッドはどのように生まれたのか―

藤　井　正　人*

はじめに
1.『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』(JUB) の中心テーマ
1.1 ガーヤトラ・サーマン
1.2「詩節のないサーマン」「身体のないサーマン」
1.3 ソーマ祭本祭日のサーマ・ヴェーダ祭官による朝の詠唱（ストートラ）
1.4 第 1 詠唱 バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの「身体（詩節）のないサーマン」
2.「身体（詩節）のないサーマン」の成立
2.1 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方の変化（1）
2.2 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方の変化（2）
2.3 JUB における「身体（詩節）のないサーマン」の成立
3.「身体（詩節）のないサーマン」の背景
3.1 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる祭事
3.2 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる祭事に関する祭式思弁
4. JUB における「身体（詩節）のないサーマン」をめぐる思想展開
4.1「身体（詩節）のないサーマン」による天上界への上昇
4.2 「身体（詩節）のないサーマン」による死後の世界への再生
5. JUB と『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』(ChU)
5.1 JUB と ChU の関係：テキスト，思想，祭式
5.2 ヴェーダ学習誓戒における JUB と ChU
6. ウパニシャッドとしての JUB
6.1 ジャイミニーヤ派における JUB の位置づけ
6.2 ウパニシャッドである基準
おわりに

* ふじい　まさと　京都大学名誉教授（人文科学研究所）

## はじめに

ウパニシャッドは，古代インドの宗教儀礼文献であるヴェーダの中に現れた一群の哲学書である[1)]。その最古のものと考えられるのが（それについては **5.1** 以降で論じる），本論文で取り上げる『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』（Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa [JUB]）である。ヴェーダの歌詠部門であるサーマ・ヴェーダ（Sāmaveda [SV]）に所属する文献として，祭式歌詠に関する哲学的な思弁を主な内容としている。

現存する歌詠と文献の伝承に関する限りでは，サーマ・ヴェーダには，カウトゥマ（Kauthuma），ラーナーヤニーヤ（Rāṇāyanīya），ジャイミニーヤ（Jaiminīya）の三学派が存在している[2)]。前の二つは姉妹学派で，ともにインドの多くの地域に存在し，中心的な文献に関してはほとんど同じものを伝承している[3)]。両者を合わせてカウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派（the Kauthuma-Rāṇāyanīyas）と呼ばれることもある。それに対して，ジャイミニーヤ派は南インドのタミル・ナードゥ州とケーララ州にのみ存在し，前の二学派とは異なる歌詠と文献の伝承を有している。ジャイミニーヤ派サーマ・ヴェーダの存在が学界に知られるようになったのは比較的遅く，19 世紀の後半にイギリス人学者のバーネル（A. C. Burnell）が南インドでジャイミニーヤ派の写本群を発見・収集してからである[4)]。ロンドンの旧インド省図書館（India Office Library，現在は大英図書館 British Library に吸収）に保管されたこの写本群の中から，エルテル（H. Oertel）が当該文献の写本を選び出し，それをもとに 1894 年に Jāiminīya or Talavakāra[5)] Upaniṣad Brāhmaṇa という名称で原典と英訳をはじめて出版した [Oertel 1894][6)]。

JUB は，先行する同派の『ジャイミニーヤ・ブラーフマナ』（Jaiminīya-Brāhmaṇa [JB]）のように個々の祭式や歌詠を記述することはほとんどなく，祭式や歌詠をめぐって，あるいはそれらから離れて，さまざまな哲学的思弁を展開している。カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派に所属する有名な『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』（Chāndogya-Upaniṣad [ChU]）と内容において近い関係にあり（**5.1** 参照），ジャイミニーヤ派内ではウパニシャッドとして扱われている（**6.1** 参照）。しかし，ヴェーダの学派伝統の外にあってウパニシャッドを聖典として奉じる後世のヴェーダーンタ学派からは，JUB の一部を構成する『ケーナ・ウパニシャッド』（Kena-Upaniṣad [KenaU]）の部分 JUB 4.10.1–4 (4.18–21) を除いてウパニシャッドとは見なされなかった[7)]。この文献は，祭式や歌詠に関する具体的な記述にとぼしいことでヴェーダの研究者から，ウパニシャッドとしての位置づけが不安定であったことでウパニシャッドの研究者から十分な関心や評価を受けることがなかった[8)]。筆者は長年，JUB の研究に従事し，内容を分析するとともに，関連する祭式，歌詠，思想の解明を行ってきた[9)]。これまでの個々の成果を総合し，再検討することによって，この文献がヴェーダの文献成立史の中で最初のウパニシャッドとしてどのように生まれてきたのか，その誕生の全体像を描くことが本論文の目的である。

そのために，以下の論点について順に考察していく。

1. この文献は何を中心テーマとしているのか。
2. それ以前の文献ではその中心テーマは扱われていたのか，いなかったのか。
3. この文献がそれを中心テーマとする背景はなにか。
4. この文献はその中心テーマからどのような思想を展開したのか。
5. この文献を作り出したのがなぜこの学派（ジャイミニーヤ派）であったのか。
6. この文献を最初のウパニシャッドと見なしうる根拠は何か。

JUB はここで取り上げる内容以外に，祭式歌詠に関連して言葉，気息（プラーナ），聖音オーム（Om）などに関する思弁や，輪廻思想の生成に関して後期ブラーフマナと初期ウパニシャッドをつなぐ特色ある再生説など，インド思想史の上で重要な内容を多く含んでいる。本論文では JUB の最初のウパニシャッドとしての成立に焦点をしぼるために，それらについては詳しくは扱わない（註 9, 62 参照）。

## 1.『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』の中心テーマ

### 1.1 ガーヤトラ・サーマン

JUB のテキスト区分は，大きい順に adhyāya, anuvāka, khaṇḍa（章，節，項にあたる）からなっている[10]。現在の JUB は四つの adhyāya からなる単一の文献であるが，本来は独立した以下の三部分からなっていたと考えられる。

（1） 1.1.1（1.1）– 3.7.5（3.42）
（2） 4.1.1（4.1）– 4.9.2（4.17）
（3） 4.10.1（4.18）– 4.12.2（4.28）

最初の二部分は，末尾に教義の伝承に関する独自の師資相承の系譜（vaṃśa）を有していて，それぞれ元来は独立した書であったと考えられる。第 3 の部分は付加部分で，4.10.1–4 (4.18–21); 4.11.1–5 (4.22–26) ; 4.12.1–2 (4.27–28) の三つの小テキストに分かれ，4.10.1–4 (4.18–21) は KenaU である[11]。第 1 と第 2 の部分は，それぞれの結びで次のように中心のテーマを明言している。

（1） JUB 3.7.3 (3.40) [1] tad etad amṛtaṃ gāyatram | etena vai prajāpatir amṛtatvam agachat | etena devāḥ | etenarṣayaḥ | tad etad brahma prajāpataye [']bravīt | prajāptiḥ parame-

ṣṭhine prājāpatyāya | . . . (vaṃśa) . . .  3.7.4 (3.41) . . . (vaṃśa) . . . 3.7.5 (3.42) . . . (vaṃśa) . . . [2] tad etad amṛtaṃ gāyatram | atha yāny anyāni gītāni | kāmyāny eva tāni | kāmyāny eva tāni ‖

3.7.3 (3.40) [1] そのようなこれは不死なるガーヤトラである。これによってプラジャーパティは不死に至った。これによって神々は［不死に至った］。これによって聖仙たちは［不死に至った］。そのようなこの［ガーヤトラ］をブラフマン（中性）はプラジャーパティに語ったのだ。プラジャーパティはパラメーシュティン・プラージャーパティヤに［語った］。……（師資相承の系譜）…… 3.7.4（3.41）……（系譜続き）…… 3.7.5（3.42）……（系譜続き）……[2] そのようなこれは不死なるガーヤトラである。そして，それ以外の歌詠はまさに任意である。まさに任意である。

（2）JUB 4.9.1 (4.16) [1] evaṃ vā etaṃ gāyatrasyodgītham upaniṣadam amṛtam indro [']gastyāyovāca | agastya iṣāya śyāvāśvaye | . . . (vaṃśa) . . . 4.9.2 (4.17) . . . (vaṃśa) . . . [2] saiṣā śāṭyāyanī gāyatrasyopaniṣad evam upāsitavyā ‖

4.9.1 (4.16) [1] このようにガーヤトラのウドゥギータ（詠唱［後述 **1.3**］の主唱部）を，ウパニシャッドであり不死であるものを，インドラはアガスティヤに語った。アガスティヤはイシャ・シュヤーヴァーシュヴィに［語った］。……（師資相承の系譜）…… 4.9.2（4.17）……（系譜続き）…… [2] そのようなこのシャーティヤーヤニの，ガーヤトラについてのウパニシャッドは，かくのごとく崇拝（念想）されるべきである。

二つの部分とも，前者ではブラフマン（中性）[12] から，後者ではインドラ神から伝授され，師から弟子へと次々に継承された教えとして「ガーヤトラ」（gāyatra）の名をあげている。特に第 2 の部分はその教義を「ガーヤトラについてのウパニシャッド」（gāyatrasyopaniṣad）と称している。また第 1 の部分に対して，後代の注釈者バヴァトラータ（Bhavatrāta）が『ジャイミニーヤ・シュラウタ・スートラ』（Jaiminīya-Śrautasūtra [JŚS]）に対する注釈の中で，「前ガーヤトラ・ウパニシャッド」（pūrvā gāyatropaniṣad）という名で言及している[13]。彼の時代に[14] これら二つの部分がジャイミニーヤ派内で「前／後ガーヤトラ・ウパニシャッド」と呼ばれていた可能性がある。

ガーヤトラはサーマン（sāman）（ヴェーダ歌詠の曲･旋律）の一つで，ガーヤトリー 韻律（8 音節 3 行）の詩節の上で歌われることからその名がある（gāyatrī́- > gāyatrá-）[15]。神聖視されているサーヴィトリー詩節（RV 3.62.10）が歌われるときにも，このサーマンが用いられる[16]。ガーヤトラ・サーマンは，JUB に先立つ JB (1.87–104; 111–115; 259–273; 315–321) においてすでに詳しく取り扱われている（**2.1** 参照）[cf. Fujii 2009–2010: 7–18]。それにもかかわらず，何故，JUB の

中核である第１と第２の部分の中心テーマとされているのか。あるいは，そこで説かれているのは，通常のガーヤトラ・サーマンと異なる特別なものなのか。この問いへの答えを示唆するものが, JUB に現れる「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）と「身体のないサーマン」（aśarīra sāman）という謎めいた語である。

### 1.2「詩節のないサーマン」「身体のないサーマン」

JUB において「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）という語は，天上界を望んだ神々がプラジャーパティ神から詩節（ṛc）のないサーマンを教えられ，それによって天上界へ到達したという物語の中に現れる。物語の末尾で，それがヴェーダの代表的な祭式であるソーマ祭における「朝のソーマ搾り」に関係していることが述べられる。

JUB 1.4.1–2 (1.15–16)「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）

1.4.1 (1.15) [1] devā vai svargaṃ lokam aipsan | . . . [2] te devāḥ prajāpatim upādhāvan | . . . | tathā no [']nuśādhi | yathā svargaṃ lokam āpnuyāmeti | [3] tān abravīt | sāmnānṛcena svargaṃ lokam preteti | te sāmnānṛcena svargaṃ lokam prāyan | . . . [5] ta etāny ṛkpadāni śarīrāṇi dhūnvanta āyan | te svargaṃ lokam ajayan | . . . [6] tāny ā divaḥ prakīrṇāny aśeran |

[1] 神々は天上界に到達したいと望んだ。…… [2] そこで神々はプラジャーパティのもとへ駈けよっ［て言っ］た，「……我らが天上界に到達できるように我らに教えてください」と。[3]［プラジャーパティは］彼らに言った，「詩節のないサーマンによって天上界に向かえ」と。彼らは詩節のないサーマンによって天上界に向かった。…… [5] 彼らは，身体の骨々（śarīrāṇi）[17] であるこれらの詩節の行（ṛkpadāni）[18] を振り払いながら行った。彼らは天上界を獲得した。…… [6]　それら（詩節の行）は撒き散らされて天空まで横たわっていた。

1.4.2 (1.16) [1] saivarg abhavad iyam eva śrīḥ | . . . [2] athaiṣām imām asurā[ś] śriyam avidanta | tad daivāsuram abhavat | [3] te devā abruvan | yā vai na[ś] śrīr abhūt | avidanta tām asurāḥ | kathan nv eṣām imāṃ śriyam punar apajayemeti | [4] te [']bruvan | ṛcy eva sāma gāyāmeti | te punaḥ pratyādrutyarci sāmāgāyan | tenāsmāl lokād asurān anudanta | [5] tad vai mādhyandine ca savane tṛtīyasavane ca narco [']parādho [']sti | sa yat te ṛci gāyati | tenāsmāl lokā[d] dviṣantam bhrātṛvyan nudate | atha yad anṛce devatāsu prātassavanaṃ gāyati | tena svargaṃ lokam eti |

[1] それらは詩節になった，この栄華にほかならない［詩節］に。…… [2] すると，アスラ

たちが彼ら（神々）のこの栄華を見つけて自分たちのものにした。それで，神々とアスラたちとの戦いが起こった。[3] そこで神々が言った，「我々の栄華となったものを，アスラたちは見つけて自分たちのものにした。一体，どうのようにして我らは彼らのこの栄華を奪い返すことができるのか」と。[4] 彼ら（神々）は言った，「まさに詩節の上でサーマンを歌おう」と。彼らは再び走り戻って来て，詩節の上でサーマンを歌った。それによって，彼らはアスラたちをこの世界から押し出した。[5]　それ故，真昼の［ソーマ］搾りと第三の［ソーマ］搾りにおいては，詩節には瑕疵はない。それら二つ［のソーマ搾りのサーマン］を詩節の上で歌うとき，その者はそれによって悪意ある敵対者をこの世界から押し出す。他方，詩節の上でなく，神格たち[19] の上で朝の［ソーマ］搾り［のサーマン］を歌うとき，それによってその者は天上界へ行く。

このように，「真昼のソーマ搾り」（mādhyandina savana）と「第三のソーマ搾り」（tṛtīyasavana）では，サーマンは詩節を伴って歌われるが，「朝のソーマ搾り」（prātassavana）ではサーマンは詩節なしに歌われ，それによって人は天上界へ行くと説かれている。「ソーマ搾り」（savana）とは，ソーマ祭本祭日において朝昼夕の三度繰り返される，ソーマ搾りとその他の祭事を含む祭礼全体を意味している。ここでは，ソーマ祭本祭日の「朝のソーマ搾り」におけるサーマンが，詩節を伴わずに歌われるべきであることが述べられている[20]。

「身体のないサーマン」（aśarīra sāman）は，以下に見るように，「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）と同じものをさす別の表現である。上の一節 JUB 1.4.1.5 (1.15.5) でも，詩節の行（ṛkpadāni）を「身体の骨々」（śarīrāṇi）と述べているが，「身体のないサーマン」という表現では，詩節を身体（śarīra）と直接に言い換えることで，詩節を伴わないサーマンと，それによって天上界へ行くという効果との因果関係をより明瞭に示している。この語が現れる一節では，森で再会したケーシン・ダールビヤ王の死んだ伯父がこのサーマンによって現世での身体を振り払ったことが語られる[21]。

JUB 3.6.1–2 (3.29–30)「身体のないサーマン」（aśarīra sāman）

3.6.1 (3.29) [1] uccai[ś]śravā ha kauvayeyaḥ kauravyo rājāsa | tasya ha keśī dārbhyaḥ pāñcālo rājā svasrīya āsa | . . .　[2] sa hoccai[ś]śravāḥ kauvayeyo [']smāl lokāt preyāya | tasmin ha prete keśī dārbhyo [']raṇye　mṛgayāṃ cacārāpriyaṃ vininīṣamāṇaḥ | [3] sa ha tathaiva palyayamāno mṛgān prasarann antareṇaivoccai[ś]śravasaṃ kauvayeyam adhijagāma |

[1] ウッチャイッシュラヴァス・カウヴァイェーヤはクル国の王であった。ケーシン・ダールビヤはパンチャーラ国の王で，彼の妹の子であった。…… [2] そのようなウッチャイッ

シュラヴァス･カウヴァイェーヤがこの世から去った。彼が[この世から]去ったとき，ケーシン・ダールビヤは憂いを取り除きたいと思って荒野で狩猟を行った。[3] 彼がそのように鹿たちを追って歩き回っていたとき，［鹿たちとの］間でウッチャイッシュラヴァス・カウヴァイェーヤに出会った。

3.6.2 (3.30) [1] sa hovāca | yad eva te purā rūpam āsīt | tat te rūpam | net tu tvā pariṣvaṅgāyopalabha iti | [2] om iti hovāca | brāhmaṇo vai me sāma vidvān sāmnodagāyat | sa me [']śarīreṇa sāmnā śarīrāṇy adhūnot | tad yasya vai kila sāma vidvān sāmnodgāyati | devatānām eva salokatāṃ gamayatīti |

[1] 彼（ケーシン･ダールビヤ）は言った，「あなたは以前と同じ姿形をしている。しかし，私は抱擁のためにあなたをとらえることが，まったく［でき］ない」と。[2]「そのとおりだ」と［ウッチャイッシュラヴァス・カウヴァイェーヤは］言った。「サーマンを知っているバラモンが，私のためにサーマンによってウドゥギータ（詠唱の主唱部）を歌った。そのような彼は，身体のないサーマンによって私の身体の骨々を振り払った。それ故，サーマンを知っている者が，ある人のためにサーマンによってウドゥギータを歌うとき，その人をまさに諸神格と同じ世界に住するに至らせる」と。

これらの物語によって提唱されている「朝のソーマ搾り」での「詩節のないサーマン」「身体のないサーマン」とは，具体的にはどのようなものなのか。ヴェーダ祭式の文脈の中でそれを特定するために，ソーマ祭本祭日におけるサーマ・ヴェーダ祭官たちによる朝の詠唱を次に取り上げる。

### 1.3 ソーマ祭本祭日のサーマ・ヴェーダ祭官による朝の詠唱（ストートラ）

ソーマの圧搾・献供・共飲が行われるソーマ祭本祭日（sutyā）には，3 人のサーマ・ヴェーダ祭官による詠唱（ストートラ stotra）と，1 人のリグ・ヴェーダ祭官による讃誦（シャストラ śastra）が対になって，祭式の種類ごとに定まった回数行われる。そのため，例えば，アグニシュトーマという祭式名がその祭式の最後の詠唱名「アグニシュトーマ・ストートラ」から取られたように，祭式の名が最後の詠唱名から取られることが多い。ソーマ祭の基本型であるアグニシュトーマ祭では，以下の表のように詠唱と讃誦が朝昼夕の「ソーマ搾り」(savana) で合計 12 回行われる。表には詠唱と讃誦の名称のほか，詠唱で用いられるサーマン名を記載している [cf. Parpola 1968–1969: I: 2, 13f.; Staal 1983: I, 616]。

アグニシュトーマ祭における詠唱（ストートラ）と讃誦（シャストラ）

| | サーマ・ヴェーダ祭官 | | リグ・ヴェーダ祭官 |
|---|---|---|---|
| no. | 詠唱（ストートラ） | サーマン | 讃誦（シャストラ） |
| 朝のソーマ搾り (prātassavana) | | | |
| 1 | bahiṣpavamāna-stotra | gāyatra | 第 1 ājya-śastra |
| 2 | 第 1 ājya-stotra | gāyatra | praüga-śastra |
| 3 | 第 2 ājya-stotra | gāyatra | 第 2 ājya-śastra |
| 4 | 第 3 ājya-stotra | gāyatra | 第 3 ājya-śastra |
| 5 | 第 4 ājya-stotra | gāyatra | 第 4 ājya-śastra |
| 真昼のソーマ搾り (mādhyandina savana) | | | |
| 6 | mādhyandina-pavamāna-stotra | gāyatra<br>āmahīyava<br>raurava<br>yaudhājaya<br>auśana | marutvatīya-śastra |
| 7 | 第 1 pr̥ṣṭha-stotra | rathantara / br̥hat | 第 1 niṣkevalya-śastra |
| 8 | 第 2 pr̥ṣṭha-stotra | vāmadevya | 第 2 niṣkevalya-śastra |
| 9 | 第 3 pr̥ṣṭha-stotra | naudhasa / śyaita | 第 3 niṣkevalya-śastra |
| 10 | 第 4 pr̥ṣṭha-stotra | kāleya | 第 4 niṣkevalya-śastra |
| 第三のソーマ搾り (tr̥tīyasavana) | | | |
| 11 | ārbhava-pavamāna-stotra | gāyatra<br>saṃhita<br>sapha (sabha)<br>pauṣkala<br>śyāvāśva<br>āndhīgava<br>kāva | mahāvaiśvadeva-śastra |
| 12 | agniṣṭoma-stotra (yajñāyajñīya-stotra) | yajñāyajñīya | āgnimāruta-śastra |

「朝のソーマ搾り」では，五つの詠唱（stotra）がすべてガーヤトラ・サーマンで歌われるのに対して，「真昼のソーマ搾り」と夕方の「第三のソーマ搾り」では，最初の詠唱の冒頭のみでガーヤトラ･サーマンが用いられる。2 番目以降の詠唱が，ソーマ祭用の特設祭場（mahāvedi）内の西にあるサダス（sadas）と呼ばれる祭官小屋で歌われるのに対して，朝の最初の詠唱だけは小屋の外の祭場の北東隅で歌われるので，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラ（Bahiṣpavamāna-stotra）「外で［歌われる］清まりつつある［ソーマ］への詠唱」と呼ばれる。この第 1 詠唱バヒシュ･パヴァマーナ･ストートラは，ガーヤトリー韻律の 9 詩節を使ってガーヤトラ・サーマンで歌われる。リグ・ヴェーダ（Ṛgveda [RV]）から採られたそれらの詩節は，ジャイミニーヤ派のサーマ・ヴェーダ本集である『ジャイミニーヤ・サンヒター』（Jaiminīya-Saṁhitā [JS]）の Uttara-Ārcika（歌詞の詩節を祭式の順に収録したもの）に収録されている（JS 3.1.3–11 < RV 9.11.1–3; 64.28–30; 66.10–12）。はじめの 3 詩節は次のとおりである（テキストは RV のものをあげる）。

1. úpāsmai gāyatā naraḥ pávamānāyéndave | abhí devā́ṁ (JS: devaṃ) íyakṣate ‖
2. abhí te mádhunā páyó 'tharvāṇo aśiśrayuḥ | devā́ṃ devā́ya devayú (JS: devayum) ‖
3. sá naḥ pavasva śáṃ gáve śáṃ jánāya śám árvate | śáṃ rājann óṣadhībhyaḥ ‖

1. 彼のために歌え，人々よ，清まりつつある［ソーマの］滴のために，神々に達せんとするもののために。2. アタルヴァンたちが蜜によってお前の乳を全きものした，神々を求める神々しい［乳］を神のために。3. かくして清まれ，我らの牝牛のために幸い［なれ］，人々のために幸い［なれ］，駿馬のために幸い［なれ］，食草のために幸い［なれ］，王［ソーマ］よ。

サーマ・ヴェーダの詩節は歌詠に際しては，もとの言葉に対してさまざまに変形を加えて歌われる。上の詩節が詠唱（ストートラ）として歌われるときの形を記述した古い資料はないが[22]，現代のケーララ州ジャイミニーヤ派におけるアグニシュトーマ祭の詠唱に関するスタール（F. Staal）による記録と分析がある。それによると，上の 3 詩節は詠唱では次のような形をとっている [Staal 1968: 416]。

1. 前唱部（prastāva）:[23]　o hum / upāsmai gāyatā narom /
   主唱部（udgītha）:　o vā o vā o . . . vā /
   応唱部（pratihāra）:　—[24]
   続唱部（upadrava）:　o /
   終唱部（nidhana）:　vā //
2. 前唱部（prastāva）:　abhi te madhunā payom /
   主唱部（udgītha）:　o vā o vā o . . . vā /
   応唱部（pratihāra）:　hum bhā /
   続唱部（upadrava）:　o /
   終唱部（nidhana）:　vā //
3. 前唱部（prastāva）:　sa naḥ pavasva śaṃ gavom /
   主唱部（udgītha）:　o vā o vā o . . . vā /
   応唱部（pratihāra）:　hum bhā /
   続唱部（upadrava）:　o /
   終唱部（nidhana）:　vā /

これによると，前唱部プラスターヴァ（prastāva）にあたる詩節の第 1 行のみ，ほぼテキストのまま歌われ（実際にはプラストートリ祭官によりメロディーを伴わずに唱えられ），そのあとの 2 行はすべて o vā の繰り返しにかえられている。上述のように朝の詠唱はすべてガー

ヤトラ・サーマンで歌われるので，第2詠唱以降についても，同じように詩節の第1行を除いて元のテキストが伏せられ，o vā の繰り返しにかえられている。「真昼のソーマ搾り」と「第三のソーマ搾り」においては，最初の詠唱の冒頭の3詩節だけは同じガーヤトラ・サーマンの形をとっているが，それ以外の詩節はもとのテキストをある程度残した形で歌われる。例えば，「真昼のソーマ搾り」の最初の詠唱における冒頭の3詩節に続く第4詩節は，次のようなガーヤトリー韻律の詩節である (JS 3.3.1 < RV 9.61.10)。

> uccā́ te jātám ándhaso (JS: andhasā) diví ṣád bhū́my ā́ dade | ugráṃ śárma máhi śrávaḥ ‖
> 汝（ソーマ）の芽茎から高く生まれたものは，天にありながら，地上で強力な庇護と大きな名声をつかんだ。

ガーヤトリー韻律にもかかわらず，この詩節に対しては詠唱ではアーマヒーヤヴァ（āmahīyava）というサーマンが用いられ，スタール [Staal 1968: 420] によれば次のような形で歌われている。ガーヤトラ・サーマンの場合と異なり，もとの詩節がはっきりと残されていることがわかる。

前唱部（prastāva）：　hum / uccā tā yi jātam andhasāḥ /
主唱部（udgītha）：　o ū ṣā bhū o da dā yi /
応唱部（pratihāra）：　ugraṃ śarmā /
続唱部（upadrava）：　o ha vā u vā /
終唱部（nidhana）：　stauṣe /

以上のような現代のケーララ州ジャイミニーヤ派のアグニシュトーマ祭におけるサーマ・ヴェーダ祭官の詠唱（ストートラ）の形から，先の「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）「身体のないサーマン」（aśarīra sāman）は，ソーマ祭本祭日の「朝のソーマ搾り」（prātassavana）において，ガーヤトラ・サーマンによる詠唱でもとの詩節（歌詞）を隠す歌い方のことであると推定できる。

### 1.4 第1詠唱 バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの「身体（詩節）のないサーマン」

JUB は，この特殊なガーヤトラ・サーマンをめぐってさまざまな思弁を繰り返し展開している[25]。さらに驚くべきことに，スタールによって報告された現代のジャイミニーヤ派の詩節を伴わないガーヤトラ・サーマンの歌い方（o vā o vā o vā hum bhā o vā）と同じものが，JUB の多くの箇所にそのままの形で[26]，あるいは変化させた形で[27]，あるいは部分ごとに[28]現れている。その中で特に注目すべきは，JUB の第1の部分 1.1.1 (1.1) – 3.7.5 (3.42) の最後の師資相

承の系譜（**1.1** 参照）の直前で語られるブラフマン（中性）からプラジャーパティへのガーヤトラ・サーマンの伝授の一節である。そこでは，「朝のソーマ搾り」の最初の詠唱（Bahiṣ-pavamāna-stotra）の第 1 詩節が，以下のように（1）詩節を伴う形と（2）詩節を伴わない形の両方の形で引用されている。

JUB 3.7.1 (3.38) [1] prajāpatim brahmāsṛjata | tam aprapaśyam amukham asṛjata | [2] tam aprapaśyam amukhaṃ śayānam brahmāviśat | puruṣaṃ tat | prāṇo vai brahma | prāṇo vāvainaṃ tad āviśat | [3] sa udatiṣṭhat prajānāñ janayitā | taṃ rakṣāṃsy anvasacanta | [4] tam etad eva sāma gāyann atrāyata | yad gāyann atrāyata | tad gāyatrasya gāyatratvam | [5] trāyata enaṃ sarvasmāt pāpmano ya evaṃ veda | [6] tam upāsmai gāyatā nara ity ṛcāśravaṇīyenopāgāyat | [7] . . . [8] pavamānāyendāvā abhi devam iyā hum bhā kṣātā iti soḍaśākṣarāṇy abhyagāyata | ṣoḍaśakalaṃ vai brahma | kalāśa evainaṃ tad brahmāviśat | [9] tad etac caturviṃśatyakṣaraṃ gāyatram | aṣṭākṣaraḥ prastāvaḥ | soḍaśākṣaraṃ gītam | tac caturviṃśatis sampadyante | . . . [10] tam ṛcaś śarīreṇa mṛtyur anvait | tad ya[c] charīravat | tan mṛtyor āptam | atha yad aśarīram | tad amṛtam | tasyāśarīreṇa sāmnā śarīrāṇy adhūnot |

[1] ブラフマン（中性）がプラジャーパティを創出した。彼を目が見えず，口のないものとして創出した。 [2] ブラフマンは目が見えず，口のないまま横たわっている彼に入った。それ（ブラフマン）はプルシャ（人間）［であるプラジャーパティ］に［入った］。 ブラフマンは気息なのだ。気息として，そのように彼に入った。[3] 彼は生き物たちを生み出す者として立ち上がった。そのような彼に，ラクシャスたちがとり付いた。[4] そのような彼を，［ブラフマンは］まさにこのサーマンを歌って救った。歌って（gāyan）救った（atrāyata）ことが，ガーヤトラ［・サーマン］が「ガーヤトラ」（gāyatra）と呼ばれる所以である。[5] このように知っているものは，彼（祭主）をすべての害悪から救う。[6] そのような彼に，upāsmai gāyatā naraḥ『彼のために歌え，人々よ』という詩節によって，聞かせるべきもの（？）とともに，［ブラフマンは］歌った。[7] …… [8] pavamānāyendāvā abhi devam iyā hum bhā kṣātā「清まりつつある［ソーマの］滴のために，神々に達せんとするもののために」という 16 音節を歌った。ブラフマンは 16 の部分からなるのだ。まさに部分ごとに，そのようにブラフマンは彼（プラジャーパティ）に入った。 [9] そのようなこれが, 24 音節からなるガーヤトラである。プラスターヴァ（前唱部）は 8 音節からなる。歌詠は 16 音節からなる。それ故，24 となる。…… [10] 詩節の身体を伴っているので，死が彼（プラジャーパティ）を追ってきた。身体をもつものは死につかまる。他方，身体のないものは不死である。身体のないサーマンによって，［ブラフマンは］彼（プラジャーパティ）の身体の骨々を振り払った。

JUB 3.7.2 (3.39) [1] o vā o vā o vā hum bhā o vā iti | soḍaśaakṣarāṇy abhyagāyata | soḍaśakalo vai puruṣaḥ | kalāśa evāsya ta[c] charīrāṇy adhūnot | [2] sa eṣo ['] pahatapāpmā dhūtaśarīraḥ | tad etat tryāvṛt tryudāsaṃ gāyati | o ity udāsaḥ | ā ity āvṛt | vāg iti tad brahma | tad idam antarikṣam | so [']yaṃ vāyuḥ pavate | hum iti candramāḥ | bhā ity ādityaḥ |

[1] o vā o vā o vā hum bhā o vā と，［ブラフマンは］16 音節を歌った。プルシャ（人間）は 16 の部分からなるのだ。まさに部分ごとに，そのように彼（プラジャーパティ）の身体の骨々を振り払った。[2] かくして彼は，害悪が打ち払らわれ，身体が振り払われたもの［となった］。そのようなこの，三つの《転回》をもち，三つの《上昇》をもつものを歌う。o が《上昇》である。ā が《転回》である。そのようなブラフマンは Vāc である。それはこの中空である。それはこの風として吹き清まる。hum は月である。bhā は太陽である。

この一節では身体と死との関係が強調され，もとの詩節をそのまま歌うことは，身体を伴っているために死を招くとされている。ここで提示されているガーヤトラ・サーマンの詩節が，アグニシュトーマ祭の最初の詠唱であるバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの第 1 詩節であることは注目すべきである。本文に引用されている（1）身体を伴う形と（2）身体を伴わない形を取り出すと，以下のとおりである。

（1）upāsmai gāyatā naraḥ | pavamānāyendāvā abhi devam iyā hum bhā kṣātā ‖

（2）upāsmai gāyatā naraḥ | o vā o vā o vā hum bhā o vā ‖

実は JUB のこの箇所は，先行する JB のバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方に関する箇所の中の一節（1.111）を借用して，「身体（詩節）のないサーマン」についての文章に作り変えたものである。「身体（詩節）のないサーマン」がどのように成立したかを論じる次章の最後（**2.3**）に，この一節を再度取り上げる。

## 2.「身体（詩節）のないサーマン」の成立

### 2.1 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方の変化（1）

このように JUB は，ソーマ祭の第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラにおける「身体（詩節）のないサーマン」を中心テーマとしている。そうであれば，次に問題となるのは，「身体（詩節）のないサーマン」が実際の歌詠としていつどこで現れたのかである。JUB ではじ

めて現れたものなのか，あるいはJUB以前のどこかですでに現れていたものなのか。それを解明するために，サーマ・ヴェーダ文献で，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラにおけるガーヤトラ・サーマンの歌い方がどのように記述されているかを検証する。これに関しては [Fujii 2009–2010] で詳細に論じているので，ここではそこで明らかになったことを簡略に述べる。年代的に対象となる文献は，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の『パンチャヴィンシャ・ブラーフマナ』（Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa [PB]）と『シャドヴィンシャ・ブラーフマナ』（Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa [ṢaḍvB]），ジャイミニーヤ派のJBとJUBである。JUBを除いたPB，ṢaḍvB，JBの文献としての成立順序について，ボーデヴィッツ（H. W. Bodewitz）は，PB → JB kernel → JB addenda → ṢaḍvBと結論付けている [Bodewitz 1990: 19–21]。この順序は，以下に説明するガーヤトラ・サーマンの歌い方の変化の順におおむね一致している。

バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方を記述している箇所は，PB 6.8–7.1; JB 1.87–104; 111–115; 259–273; 315–321; ṢaḍvB 2.1–3である。その中でPBの説明はもっとも簡単である。要約すると，(1) この詠唱はあちら向きの（すなわち繰り返しのない）詩節で歌われる（PB 6.8.9 parācībhiḥ stuvanti）[cf. 註48]；(2) himの発声は1回だけ（PB 6.8.15 sakṛddhiṅkṛtābhiḥ … stuvanti）[29]；(3) 最後の詩節はā「こちらへ」という語を含んでいる（PB 6.8.17 āvatīm uttamāṃ gāyet）；(4) 最後の詩節はラタンタラ・サーマンの音節（すなわちbhaの繰り返し）をもつ（PB 6.8.18 rathantaravarṇām uttamāṅ gāyet）；(5) 三つの転回（āvṛt）を伴うように歌われる（PB 7.1.1 tryāvṛd geyam）；(6) ヒンカーラ（hum āまたはhim ā）は心の中で唱えられる（PB 7.1.4f. hiṃkāro … manasā dhyeyaḥ）[cf. 註24]；(7) 不分明に歌われる（aniruktaṅ geyam）[30]。

一方，JBはPBに比べて非常に多くの説明をバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラに費やしている。JBのこれらの箇所は，内容から，1）1.87–96; 111–115，2）1.97–104; 259–273; 315–321の二つのグループに分けることができる。JBの最初のグループにおけるバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方の説明は，(6) と (7) の規定を欠いているほかは，PBのそれとほとんど同じである。このようにPBとJBの第1グループでは，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラに対してはこれ以上の規定は述べられておらず，ガーヤトラ・サーマン自体は詩節を伴って歌われたと考えられる。

それに対してJBの第2グループでは，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの9詩節の内の最初の6詩節に対して6種の変化形が提示されている。それら6種の変化した形で歌われる6詩節は，馬車の用語を使ってドゥル（dhur）と総称され[31]，個々の詩節は順に，1. retasyā（註24参照），2. gāyatrī, 3. triṣṭubh, 4. jagatī, 5. anuṣṭubh, 6. paṅktiと呼ばれる。最初のretasyāを除いて韻律名が用いられているが，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの詩節のガーヤトリー韻律をそれらの韻律に変形したものではない[32]。JBはこれらの6種の変形詩節（dhur）を3箇所で説明している（1.97–104; 259–273; 315–321）。3箇所でほぼ同じ説明がなされているが，最後

の箇所では，それぞれの変形詩節の全体または一部分が引用されている。それらの資料を集めることによって 6 つの変形詩節を復元することは, ある程度可能である。前述（**1.2**）の現代ケーララの第 1 詠唱のはじめの 3 詩節との比較のために，以下に復元した最初の 3 詩節をあげる。JB に実際の歌詠の形が引用で示されている部分はイタリック体で，その他の部分はローマン体で，明瞭に唱えるように明示されている部分はボールド体で記した。すべての復元形と典拠になった資料は [Fujii 2009–2010: 10–15] に集録している。もとの 詩節（JS 3.1.3–5 < RV 9.11.1–3）は上掲（**1.3**）のとおり。

第 1 詩節（retasyā）典拠：JB 1.100–101; 259; 315–317

３人で:　　*o hum*

前唱部（prastāva）: upāsmai gāyatā narom

主唱部（udgītha）:　pavamānāyendave *abhāyi dāyivaṃ o yā*

応唱部（pratihāra）:（*hum bhā*）［心の中で］

続唱部（upadrava）: *kṣate*

終唱部（nidhana）:　*bhūḥ*

第 2 詩節（gāyatrī）典拠：JB 1.102 [44,20–22]; 260 [108,11–14]; 317 [132,34–133,1]

前唱部（prastāva）: abhi te madhunā payom

主唱部（udgītha）:　*o3rvāṇo aśiśrāde3yurvaṃ devāya dā*

応唱部（pratihāra）: *hum bhā*

続唱部（upadrava）: vayum

終唱部（nidhana）:　*sat*

第 3 詩節（triṣṭubh）典拠：JB 1.102 [44,23–25]; 260 [108,15–17]; 317 [133.2–3]

前唱部（prastāva）: sa naḥ pavasva śaṃ gavom

主唱部（udgītha）:　śaṃ janāya śam arvate śaṃ rājann o***ṣodhā***

応唱部（pratihāra）: *hum bhā*

続唱部（upadrava）: bhayaḥ

終唱部（nidhana）:　*jyotiḥ*

バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラのこれら 6 つの変形詩節（dhur）は，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の PB ではまったく触れられず，PB の補遺文献である ṢaḍvB（2.1–3）で述べられている。ṢaḍvB はしばしば JB と同一の語句を用いながら，より簡潔に記述している。さ

らに，JB では異なる文脈にある文章を集めて，詩節ごとにまとめることも行っている（例えば，後述の JB で dhur の別形として示されている「神秘的な形」に関する文言を通常の dhur の説明の中に組み込んでいる）。カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派はジャイミニーヤ派内で成立していた変形詩節（dhur）の歌い方を遅れて採用し，JB からその記述を借用して ṢaḍvB の中に取り込んだものと思われる。ただし JB と異なり，ṢaḍvB は変形詩節（dhur）の実際の形は引用していない。カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派では六つの変形詩節（dhur）は，のちのシュラウタ・スートラ，カウトゥマ派の『ラーティヤーヤナ・シュラウタ・スートラ』（Lāṭyāyana-Śrautasūtra [LŚS]）と ラーナーヤニーヤ派の『ドラーヒヤーヤナ・シュラウタ・スートラ』（Drāhyāyaṇa-Śrautasūtra [DŚS]）においても保持され，そこに歌詠形が引用されている（LŚS 7.12.3–7.13.6 = DŚS 21.3.15–21.4.7）[33]。JB の場合と同様，ṢaḍvB と LŚS–DŚS の記述をもとにそれらの詩節の歌い方を復元することができる。復元された変形詩節（dhur）については [Fujii 2009–2010: 19–26] 参照。

### 2.2 第１詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方の変化（２）

このように JB はバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラに関する第２グループで，dhur と称される変形詩節を提示している。それとともに，JB は詩節をさまざまな形に変形することに対して疑義があったことも伝えている。詩節を変形して歌うことに対して，JB は「歌い分ける」（vi-gā）という語を用いている。六つの変形詩節（dhur）に関する最初の箇所（1.97–104）では，JB はそれらを説明したあと，変形詩節（dhur）を歌い分けるべきか，歌い分けるべきでないかを論じ[34]，それらにかわる別の歌い方として，以下のような「神秘的な形で歌う（parokṣeṇa rūpeṇa gāyati）」歌い方を提示している。この歌い方は，六つの変形詩節（dhur）を歌い分けないで，前唱部（プラスターヴァ）のあと，まさに同じガーヤトラ・サーマンを歌い，最後の終唱部（ニダナ）だけは変形詩節（dhur）のものを発することで，それぞれの変形詩節を神秘的な形で歌ったことにするというものである。

JB 1.104 [45,19–28] gāyatryāṃ prastutāyāṃ gāyatram eva gāyan pṛthivīṃ manasā gacchet. prāṇyāpānyāt. sad iti nidhanaṃ karoti. parokṣeṇaivainām tad rūpeṇa gāyati.

彼（ウドゥガートリ祭官）は，［プラストートリ祭官によって］ガーヤトリー（第２変形詩節 dhur）の前唱部（プラスターヴァ）が唱えられたあと，まさにガーヤトラ［・サーマン］を歌いながら，思考によって大地へ行くべきである。 息を吐き出し，息を吸い込むべきである。「sad」と終唱部（ニダナ）を発声する。まさに神秘的な形によって，そのときそれ（ガーヤトリー）を歌うことになる。

triṣṭubhi prastutāyāṃ gāyatram eva gāyan antarikṣaṃ manasā gacched.

didṛkṣetaivākṣibhyāṃ. jyotir iti nidhanaṃ karoti. parokṣeṇaivaināṃ tad rūpeṇa gāyati.
彼（ウドゥガートリ祭官）は，［プラストートリ祭官によって］トリシュトゥブ（第３変形詩節 dhur）の前唱部（プラスターヴァ）が唱えられたあと，まさにガーヤトラ［・サーマン］を歌いながら，思考によって中空へ行くべきである。両目によってまさに見ようとすべきである。「jyotis」と終唱部（ニダナ）を発声する。まさに神秘的な形によって，そのときそれ（トリシュトゥブ）を歌うことになる。

jagatyāṃ prastutāyāṃ gāyatram eva gāyan diśaḥ paśūn manasā gacchec. chuśrūṣetaiva karṇābhyām. iḷeti nidhanaṃ karoti. parokṣeṇaivaināṃ tad rūpeṇa gāyati.
彼（ウドゥガートリ祭官）は，［プラストートリ祭官によって］ジャガティー（第４変形詩節 dhur）の前唱部（プラスターヴァ）が唱えられたあと，まさにガーヤトラ［・サーマン］を歌いながら，思考によって諸方位と家畜へ行くべきである。 両耳によってまさに聞こうとすべきである。「iḷā」と終唱部（ニダナ）を発声する。まさに神秘的な形によって，そのときそれ（ジャガティー）を歌うことになる。

anuṣṭubhi prastutāyāṃ gāyatram eva gāyan divaṃ manasā gacched. vācā gāyan vāg iti nidhanaṃ karoti. parokṣeṇaivaināṃ tad rūpeṇa gāyati.
彼（ウドゥガートリ祭官）は，［プラストートリ祭官によって］アヌシュトゥブ（第５変形詩節 dhur）の前唱部（プラスターヴァ）が唱えられたあと，まさにガーヤトラ［・サーマン］を歌いながら，思考によって天穹へ行くべきである。言葉（声）によって歌いながら,「vāc」と終唱部（ニダナ）を発声する。まさに神秘的な形によって,そのときそれ（アヌシュトゥブ）を歌うことになる。

paṅktyāṃ prastutāyāṃ gāyatram eva gāyann ṛtūn manasā gacchet. parokṣeṇaivaināṃ tad rūpeṇa gāyati.
彼（ウドゥガートリ祭官）は，［プラストートリ祭官によって］パンクティ（第６変形詩節 dhur）の前唱部（プラスターヴァ）が唱えられたあと，まさにガーヤトラ［･サーマン］を歌いながら，思考によって季節たちへ行くべきである。まさに神秘的な形によって，そのときそれ（トリシュトゥブ）を歌うことになる。

ここで述べられている歌い方は，感官のコントロールと精神集中をともなう歌詠法として注目される。ほとんど同じ語句で表現されている感官のコントロールと精神集中が，JUB においてバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラ直前の「ユクティ」（yukti）と呼ばれている行為について語られている[35)]。「ユクティ」は類語の「ヨーガ」（yoga）と同じく「（馬などを車に）繋ぐこと」を原義とし，祭式用語として「祭式行為への始動ないし準備」を意味している。バヒシュ･パヴァマーナ･ストートラに関連して，感官のコントロールと精神集中が，「ユクティ」

としてサーマ・ヴェーダ祭官によって実践されていた可能性がある[36]。

詩節を変形して「歌い分ける」ことは，歌詠行為を分化させることである。祭式はしばしば生殖と同一視され，祭式行為の分化は発生した胎児が多様な形に変化していくことに対応していると考えられていた[37]。しかし分化だけでは分裂や混乱に終わってしまうと危惧されてもいた[38]。この欠点を補うものとして，JB は変形詩節（dhur）に関する第 3 の箇所（1.315–321）で，「歌い合わせる」（saṃ-gā）という行為を導入している。具体的には，変形詩節（dhur）を「歌い分け」ながらも，すべての詩節のニダナ（終唱部）を同じ o vā と唱えることで「歌い合わせる」ことを提唱している[39]。

JB は当該箇所の最後（1.320–321 [134,15–23]）で，変形詩節（dhur）やその別形にかわるもっとも簡単なものとして，o vā o vā による歌い方を教えている。この歌い方は，思考（manas）と言葉（vāc）の 2 つの dhur からなるとされ，これら 2 つの dhur によって，すべての dhur が達成されたことになると言われている[40]。これ以上の具体的な説明はないが，最後に提示されているこの歌い方は，JUB の「身体（詩節）のないサーマン」に近いものである。

### 2.3 JUB における「身体（詩節）のないサーマン」の成立

JUB はバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの歌い方のさらなる新機軸として，すべての詩節を単音の繰り返しに置き換える歌い方である「身体（詩節）のないサーマン」を提唱した。前章の最後（**1.4**）に取り上げた JUB 3.7.1–2（3.38–39）は，JB のバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラに関する第 1 グループの中のガーヤトラ・サーマンについての一節（1.111 [48,12–20]）を，新機軸の「身体（詩節）のないサーマン」のために翻案したものである。JB のもとの一節は，プラジャーパティが生き物たちをラクシャスたちからガーヤトラ・サーマンによって救い出す話と，ガーヤトラ・サーマンの「三つの《転回》をもつ」（tryāvṛt）と「三つの《上昇》をもつ」（tryudāsa）についての説明の二つ部分からなっている。

JB 1.111 [48,12–20] prajāpatiḥ prajā asṛjata. tā aprāṇā asṛjata. tābhya etenaiva sāmnā prāṇam adadhāt. prāṇo vai gāyatram. sarvam āyur eti ya evaṃ veda. tāḥ prāṇaṃ vividānā rakṣāṃsy anvasacanta. tā etad eva sāma gāyann atrāyata. yad gāyann atrāyata tad gāyatrasya gāyatratvaṃ. trāyata enaṃ sarvasmāt pāpmano ya evaṃ veda. tad ūrdhvam iva geyam. ūrdhvo vai svargo lokas. svargasyaiva lokasya samaṣṭyai. tryāvṛd geyaṃ. trayo vā ime lokā. eṣāṃ lokānām āptyai. tryudāsaṃ geyaṃ. trayo vai prāṇāpānavyānās. teṣāṃ saṃtatyai. . . .

プラジャーパティが生き物たちを創出した。彼らを気息のないものとして創出した。彼らのために，まさにこのサーマンによって気息を置いた。ガーヤトラ［・サーマン］は気息

なのだ。このように知っているものは，すべての寿命をまっとうする。気息を得た彼らに，ラクシャスたちがとり付いた。そのような彼らを，［プラジャーパティは］まさにこのサーマンを歌って救った。歌って（gāyan）救った（atrāyata）ことが，ガーヤトラ［・サーマン］が「ガーヤトラ」（gāyatra）と呼ばれる所以である。このように知っているものは，彼（祭主）をすべての害悪から救う。それ（ガーヤトラ・サーマン）は，いわば上方へ歌われるべきである。天上界は上方にあるのだ。まさに天上界への到達のために。三つの《転回》をもつように歌われるべきである。これらの世界は三つなのだ。これらの諸世界の獲得のために。三つの《上昇》をもつように歌われるべきである。呼気，吸気，分気は三つなのだ。それらの連続のために。……

JUB はこの一節の枠組みを借用し，前半の配役をプラジャーパティと生き物たちからブラフマン（中性）とプラジャーパティにかえるとともに，ガーヤトラ・サーマンの詩節を伴う形と詩節を伴わない形の両者を扱うためにテキストを拡大させている。さらに新たに導入した「身体（詩節）のないサーマン」に適合するように，後半の「三つの《転回》をもつ」（tryāvr̥t）と「三つの《上昇》をもつ」（tryudāsa）に対して，三度繰り返される o vā の o が《上昇》であり，ā（実際には vā）が《転回》であるという新しい定義を与えている[41]。

バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラにおけるガーヤトラ・サーマンの詩節を伴わない形である「身体（詩節）のないサーマン」は，JUB 以外には記録されていない。ジャイミニーヤ派では，JUB がそれに関する唯一の典拠として扱われてきた[42]。この詩節を伴わないガーヤトラ・サーマンは，JUB によって導入されたものと同じ形で，現代のジャイミニーヤ派のサーマ・ヴェーダ伝承にまで忠実に継承されている。

## 3.「身体（詩節）のないサーマン」の背景

### 3.1 第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる祭事[43]

このように，JUB はソーマ祭の第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラのガーヤトラ・サーマンに対して「身体（詩節）のないサーマン」という新しい歌い方を提唱した。この新たな歌い方の提唱とそれに関わる思想展開がどのような背景をもっていたかについて，JUB に先行する JB をもとに祭式と思想の面から次に考察する。

アグニシュトーマ祭は，全日程が 5 日間のソーマ祭である。はじめの 4 日間は前祭の期間で，祭具の準備，祭場の設営，祭主の潔斎，各種の予備祭などが行われる。5 日目が本祭日（sutyā）で，その日にソーマ祭のメインイベントであるソーマの圧搾・献供・共飲を中心とした祭事が執行される。朝昼夕の三度くり返される「ソーマ搾り」（savana）と総称される祭礼は共通した

構造をとっていて，それぞれにおいて，ソーマが搾られ，濾過されて杯に汲み分けられたあと，サーマ・ヴェーダ祭官による詠唱，リグ・ヴェーダ祭官による讃誦，ヤジュル・ヴェーダ祭官によるソーマの献供，祭主と祭官たちによるソーマ共飲がくり返される。ただし，「朝のソーマ搾り」だけは，昼と夕の「ソーマ搾り」とは異なり，以下のような第１詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる独自の祭事を含んでいる。

本祭日，リグ・ヴェーダ祭官による早朝の讃歌朗詠（Prātaranuvāka）の後，ソーマ祭用の特設祭場（mahāvedi）内のハヴィルダーナ（havirdhāna）と呼ばれる供物小屋で，ヤジュル・ヴェーダ祭官たちによってソーマの圧搾・濾過・汲み分けが行われる。それが終わると，祭主と祭官たちが，ソーマ祭の祭場に新たに設置された献供火壇（uttaravedi）にそれぞれ献供したあと，一列になって北へ這って行き，祭場の外へでる。そのあと，３人のサーマ・ヴェーダ祭官によって第１詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラが歌われる。先に述べたように，この詠唱は，祭官小屋（sadas）の内で歌われる他の詠唱と異なり，祭場の北東隅で歌われる。詠唱の終了後，祭官たちが腕を持ち上げるような所作をする。そのあと，ウドゥガートリ祭官（サーマ・ヴェーダの主祭官）が祭主に祭場の北の境界をまたがせる（右足を祭場の内に，左足を祭場の外にして）[44]。こののち，祭官小屋にある各祭官たちのディシュニヤ（dhiṣṇya）と呼ばれる炉に火がともされ，祭式の中心であるソーマの献供へと進んでいく。朝昼夕のすべての祭事が終わったあと，祭主と祭官たちは沐浴（avabhṛta）をして５日間にわたったアグニシュトーマ祭を終了する。これらの祭事を並べると以下のようになる。

アグニシュトーマ祭

１－４日目　祭具・供物の準備，祭場の設営，祭主の潔斎，予備祭

５日目　　本祭

　朝　　1. 早朝の讃歌朗詠（Prātaranuvāka）

　　2. ソーマの圧搾，濾過，汲み分け

---

　　3. 祭主と祭官たちが北へ這っていく

　　4. 祭場の北東隅で第１詠唱（Bahiṣpavamāna-stotra）が歌われる

　　5. 祭官たちが腕を持ち上げる

　　6. 祭主に祭場の北の境界をまたがせる

　　7. 祭官たちの炉（dhiṣnya）に火がともされる

---

　　8. 詠唱（stotra），讃誦（śastra），ソーマの献供・共飲

　昼　　1. ソーマの圧搾，濾過，汲み分け

2. 詠唱（stotra），讃誦（śastra），ソーマの献供・共飲

夕　1. ソーマの圧搾，濾過，汲み分け

2. 詠唱（stotra），讃誦（śastra），ソーマの献供・共飲

3. 終わりの沐浴（avabhṛta）

このようなソーマ祭本祭日の祭事次第から，本祭の中心であるソーマの献供が，朝の第１詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる一連の祭事と夕方の終わりの沐浴の間にきていることがわかる。いわば，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの諸祭事は，ソーマ祭の中心部への最後の導入行為という位置づけになっている。

### 3.2 第１詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる祭事に関する祭式思弁

ソーマ祭中心部への最後の導入行為として，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの一連の祭事はどのような意味を担っていたのか。まず，祭主と祭官たちが北へ這っていく行為について，JUB に先行する JB は以下のように述べている [cf. Klaus 1986: 168]。

JB 1.85 [37,29-32] prāṇān vāvaitat saṃtatya svargaṃ lokaṃ sarpanti yad antar havirdhāne grahān gṛhītvā bahiṣpavamānaṃ sarpanti. saṃtatās sarpanti. saṃtata iva vai svargo lokas. svargasyaiva lokasya saṃtatyā avyavacchedāya. prāvabhrā iva sarpanti. pratikūla iva vā itas svargo lokas. tad yathā vā adaḥ pratikūlam udyan prāvabhra iva bhavaty evam evaitat.

ハヴィルダーナ（供物小屋）で［ソーマを］汲んだ後，［祭官たちと祭主が］バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラ［が歌われる場所］へ這っていくとき，彼らは気息をつないで天上界へ這っていくのだ。彼らはつながって這っていく。天上界はつながっているかのようなのだ。ほかならぬ天上界のつながりを断ち切ることのないように。彼らは前へ身をかがめるかのように這っていく。天上界はここ（地上）から，あたかも岸の斜面をさかのぼるかのようである。それ故，あちらへ岸の斜面をさかのぼっているとき，前へ身をかがめるかのようになるように，まさにそのようにこのとき［することになるのだ］。

祭主と祭官たちが北へ《つながって這っていく》という特徴的な行進は，天上界へ全員が天上界へひとつなぎになってのぼって行くための行為として理解されている。前へ身をかがめる動作は，そのためのものとされている。祭主と祭官たちは，祭場の北東角の外にあるチャートヴァーラ（cātvāla）と呼ばれる穴のそばまで這っていく。その直後，その穴のすぐ南の祭場内の北東隅で[45]，３人のサーマ・ヴェーダ祭官が第１詠唱を歌う。それについて，以下のように

言われている。

JB 1.87 [38,19–26] (cf. JB 2.5) ādityo vā etad atrāgra āsīd yatraitac cātvālam. ado 'gnis. sa idaṃ sarvaṃ prātapat. tasya devāḥ pradāhād abibhayus. te 'bruvan. sarvaṃ vā ayam idaṃ pradhakṣyati. vīmau pariharāmeti. tam atas tisṛbhir ādadata. tisṛbhir antarikṣāt. tisṛbhir divam agamayan. . . . sa yaṃ kāmayeta yajamānas svargalokas syād iti cātvālam evainam avakhyāpyodgāyet. tam atas tisṛbhir evādadate. tisṛbhir antarikṣāt. tisṛbhir divaṃ gamayanti. svargaloko yajamāno bhavati.
太初，太陽はここ（地上の祭場）に，チャートヴァーラの穴があるところにあった。祭火はあちらに［あった］。それ（太陽）はこの一切を熱した。神々はそれに焼かれるのを怖れた。彼らは言った，「これはこのすべて（全世界）を焼くだろう[46]。これら二つを置き換えよう」と。彼らは［バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの 9 詩節の最初の］3［詩節］によってそれ（太陽）をここ（地上の祭場）から取った。［次の］3［詩節］によって中空から［取った］。［最後の］3［詩節］によって天穹へ行かせた。…… もし彼（ウドゥガートリ祭官）が「祭主が天上界に属するものとなるように」と望むなら，彼（祭主）にチャートヴァーラの穴を眺めさせからウドゥギータ（詠唱の主唱部）を歌うべきである。彼は［バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの 9 詩節の最初の］3［詩節］によって彼（祭主）をここ（地上の祭場）から取る。［次の］3［詩節］によって中空から［取る］。［最後の］3［詩節］によって天穹へ行かせる。祭主は天上界に属するものとなる。

チャートヴァーラは，ソーマ祭場の献供火壇（uttaravedi）を築くための土を掘り出した穴である。上の一節に見られるように太陽と関係づけられていて，天上界へ通じる穴と見なされている。バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをこの穴のそばで歌うことによって祭主をその穴を通して天上界へのぼらせると理解されていたようである[47]。JB によれば，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの後，祭官たちは腕を持ち上げる動作を行うが，これもまた，第 1 詠唱によって天上界へ向かってのぼらせた祭主をより確実に天上界へ到達させるためとされている。

JB 1.89 [39,27f.] stutvoddravanti. yajamānam eva tat svargaṃ lokaṃ gamayanti. bāhūn udgṛhṇanti. yajamānam eva tat svarge loke samādadhati.
詠唱を歌った後，彼ら（祭官たち）は上（北）へ走り出る。それによって，ほかならぬ祭主を天上界へ行かせることになる。彼らは腕を上に持ちあげる。それによって，ほかならぬ祭主を天上界に完全に置き定めることになる。

ここで留意すべきは，JB の祭式思弁においてはバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラによる天上界への上昇が，戻ることのない一方向のものとは考えられていなかったことである。天上界へのぼった祭主が地上から切り離されない保証として，JB はいくつかの仕掛けを提示している。上にあげたバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの 3 詩節ずつによる祭主の上昇の一節（JB 1.87）では，そのあとに次のように述べられている。

JB 1.87 [38,26-30] īśvaro ha tu pramāyuko bhavitoḥ. parācīṣu hi stuvanti. . . . yad evāda āvad uttamam akṣaraṃ bhavati tenāsmāl lokān nāvacchidyate.
しかし彼（祭主）は早死にするおそれがある。［サーマ・ヴェーダ祭官たちが］あちら向きの（すなわち繰り返しのない）［9 詩節］の上で詠唱を歌うから[48]。…… あちらには，まさに［最終詩節 áchā samudrám índavó 'staṃ gā́vo ná dhenávaḥ | ágmann ṛtásya yónim á ‖「［ソーマの］滴たちは大海へ，乳牛たちが家へ［帰る］ように，天理の母胎へ帰ってきた，こちらへ」（RV 9.66.12 > JS 3.1.11）の「こちらへ」を意味する］ā という最後の音節があるので，それによって彼はこの世界から切り離されることはない。

天上界へのぼりながらも地上の世界から切り離されないことについては，先の祭主と祭官たちが北へ這っていく場面でも語られている。そこでは，プラスタラ（prastara）と呼ばれる草束を祭場の内と外の両方に投げることや，祭主の妻が祭場の外にいることが地上の世界から切り離されない保証となっている。

JB 1.86 [38,8-16] prastaraṃ harantas sarpanti. yajamāno vai prastaro. . . . yad upāsyet svargaloko yajamānas syād avāsmāl lokāc chidyeta. yad atyasyed asmin loke pratitiṣṭhed ava svargāl lokāc chidyeta. tad āhur. ardhātmā vā eṣa yajamānasya yat patnī. yat sā bahirvedi bhavati tenāsmāl lokān nāvacchidyata. upaivāsyed ity. uta vai patnī na bhavaty. atho yady api syād upaivānyad asyed aty anyad asyed. yad upāsyati tena svargaloko. yad atyasyati tenāsmāl lokān nāvacchidyate.
彼らはプラスタラの草束を運びながら這っていく[49]。プラスタラの草束は祭主なのだ。…… もし彼（アドヴァリユ祭官）が［プラスタラを］近くに（祭場内に）投げるなら，祭主は天上界に属するものとなり，この世界から切り離されるだろう。もし［祭場を］越えて投げるなら，［祭主は］この世界にしっかりと立ち，天上界から切り離されるだろう。それについて，［人々は］言っている，「祭主の妻は祭主の半身なのだ。彼女が祭場の外にいることによって，［祭主は］この世界から切り離されない。［それ故］近くに（祭場内に）だけ投げるべきである」と。祭主の妻がいないこともあるのだ。さらに，［祭主の妻が］

いたとしても，［草束の］一方の部分を［祭場に］投げ，他の部分を［祭場を］越えて投げるべきである。［祭場に］投げることによって，［祭主は］天上界に属するもの［となる］。［祭場を］越えて投げることによって，［祭主は］この世界から切り離されない。

同様のことをより劇的に表しているのが，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの後，ウドゥガートリ祭官が祭主を祭場の北の境界へ連れて行き，彼に東を向いて，右足を祭場の内に，左足を祭場の外にして境界をまたがせる行為である。ただし，この行為は JB に記述はなく，同派のシュラウタ・スートラ（Jaiminīya-Śrautasūtra [JŚS]）で規定されている。

JŚS 1.11 [Gaastra 1906: 14,3–5] utthāyottare vedyante yajamānaṃ vikramayati. mā svargāl lokād avācchaitsīr iti dakṣiṇaṃ pādam antarvedi. māsmād iti savyaṃ bahirvedi.
立ち上がったあと，祭場の北の境界で祭主に［境界を］またがせる。「わたしを天上界から切り離すな」と［言って］右足を祭場の内に，「わたしをこの［世界］から［切り離すな］」と［言って］左［足］を祭場の外に［おく］。

注目すべきは，上述のプラスタラの草束や祭主の妻のときも，祭主が境界をまたぐときも，祭場の内が天上界，祭場の外が地上と見なされていることである。祭主と祭官たちが祭場内から北へ這っていくことによって天上界へのぼるとされているので，その段階では祭場はいまだ地上の意味を保っている。バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる諸祭事を経て，祭場は完全に天上界になったとされているようである[50)]。

このように，すでに JB の段階で，バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラはその前後の行為とセットになって，天上界への上昇と結び付けられていた。そのことを強調するかのように，幾重にも行為が重ねられていた。JUB では，次に見るように，詠唱そのものによる天上界への上昇の具体的なプロセスが語られるようになる。それとともに，天上界への上昇が，天上における永遠の生命（amṛta）の獲得という一方向のものとして理解されはじめる。JUB に現れる「身体（詩節）のないサーマン」が，この思想展開に関わっている。

## 4. JUB における「身体（詩節）のないサーマン」をめぐる思想展開

### 4.1「身体（詩節）のないサーマン」による天上界への上昇

JUB 冒頭の一節 1.1.1–7 (1.1–7) は「身体（詩節）のないサーマン」をめぐる箇所の一つである。この一節は全体として，ガーヤトラ・サーマン（o vā o vā o vā hum bhā o vā）の各部分にそったテキストの構成をとっている [Fujii 1987]。最初の o vā の三度の繰り返しに関する部分で，o

vā を聖音 Om と，「言葉」を意味し，それ自身神格でもある Vāc との結合と解釈して，両者を宇宙の階層的な構成要素と同じものと見る（同置する）ことによって，「身体（歌詞）のないサーマン」による天上界への上昇を理論付けている。

JUB 1.1.2 (1.2) [1] sa yad om iti | so ['] gniḥ | vāg iti pṛthivī | om iti vāyuḥ | vāg ity antarikṣ-am | om ity ādityaḥ | vāg ity dyauḥ | . . . | [2] sa ya evaṃ vidvān udgāyati | om ity evāgnim ādāya pṛthivyām pratiṣṭhāpayati | om ity eva vāyum ādāyāntarikṣe pratiṣṭhāpayati | om ity evādityam ādāya divi pratiṣṭhāpayati | . . . | 1.1.3 [1] o3 vā3 o3 vā3 o3 vā3 hum bhā o vā iti | karoty eva etābhyām | sarvam āyur eti | [2] sa yathā vṛkṣam ākramaṇair ākramamāṇa iyāt | evam evaite dve-dve devate sandhāyemān lokān rohann eti |

[1] Om は火である。Vāc は大地である。Om は風である。Vāc は中空である。Om は太陽である。Vāc は天穹である。…… このように知りながらウドゥギータ（詠唱の主唱部）を歌うものは，まさに Om と［言って］火を取り，大地にしっかりと置く。まさに Om と［言って］風を取り，中空にしっかりと置く。まさに Om と［言って］太陽を天穹にしっかりと置く。…… 1.1.3 (1.3) [1] o3 vā3 o3 vā3 o3 vā3 hum bhā o vā と，彼（ウドゥガートリ祭官）は二つの神格（Om と Vāc すなわち o vā）によってまさに発声する。彼（祭主）はすべての寿命をまっとうする。[2] あたかも一歩一歩のぼることによって木をのぼっていくように，まさにそのようにこれら二つの神格（Om と Vāc）をつなぎ合わせて（すなわち o vā と三度唱えて），これらの世界（大地，中空，天穹）をのぼっていく。

つづいて，最初の o vā の繰り返しのあとの hum bhā と最後の o vā について，hum bhā によって追ってくる飢えである死を撃退して，最後の o vā で太陽を抜けて天上界に到達することが語られている。

JUB 1.1.3 (1.3) [3] eka u eva mṛtyur anvety aśanayaiva | [4] atha hiṃkaroti | candramā vai hiṃkāraḥ | annam u vai candramāḥ | annenāśanayāṃ ghnanti | [5] tān-tām aśanayām annena hatvom ity etam evādityaṃ samayātimucyate | etad eva divaś chidram | [6] yathā khaṃ vānasa[s] syād rathasya vā | evam etad divaś chidram | tad raśmibhis sañchannam na dṛśyate | [7] yad gāyatrasyordhvaṃ hiṃkārāt | tad amṛtam | tad ātmānan dadhyāt | atho yajamānam |

[3] ただ一つ死だけが［彼を］追いかける，ほかならぬ飢えとして。[4] そこでヒンカーラ（hum bhā）を発声する。ヒンカーラは月なのだ。また，月は食べ物なのだ。［人々は］食べ物によって飢えを打ち殺す[51)]。[5] それぞれの飢えを食べ物によって打ち殺してから，

Om と［言って］（すなわち最後の o vā を唱えて）この太陽の真ん中を通って解放される。これ（太陽）こそが天穹の孔である。[6] あたかも荷車あるいは馬車に車軸穴があるように，天穹にはこの孔がある。それは光線たちにすっかり覆われていて見られない[52]。[7] ガーヤトラ［・サーマン］においてヒンカーラ（hum bhā）よりも後のものは不死である。そこの自分自身を置くべきである。そしてまた祭主を［置くべきである］。

このあと JUB は，天上界へのぼって来た者と，天上界の入り口にいる「恐ろしい神格」（文脈から太陽のこと）との注目すべき対話を載せている。のぼってきたものが地上での悪行を理由に通ることを拒否されるのに対して，それを見ていた当の神格こそが行為者であると答えるべきことが語られている。ここでは，のぼって来たものが自身と太陽とが一体であることを知っているかどうかが問題となっている。

JUB 1.1.5 (1.5) [1] sā haiṣākhalā devatāpasedhantī tiṣṭhati | idaṃ vai tvam atra pāpam akar ṇehaiṣyasi | yo vai puṇyakr̥t syāt | sa iheyād iti | [2] sa brūyāt | apaśyo vai tvan tat | yad ahan tad akaravam | tad vai mā tvan nākārayiṣyaḥ | tvaṃ vai tasya kartāsīti | [3] sa ha veda satyam māheti | satyaṃ haiṣā devatā | sa (sā?) ha tasya neśe yad enam apasedhet | tam upaiva hvayate |

[1] そのようなこの恐ろしい（akhala）[53] 神格（太陽）が［のぼってきたものを］追い払いならが立っている。「お前は［地上の］この場所でこの悪行を行ったのだ。お前はここを通ってはならない。善行を行う者であったなら，その者はここを通ることができるだろう」と［言いながら］。[2] 彼は言うべきである，「お前は私が行っていたことを見ていた。お前は私にそれをさせなかっただろう（させないこともありえただろう）。お前がそれの行為者なのだ」と。[3]［その神格は言う］「彼は知っている。私に真実を述べている」と。この神格は真実である。その［神格］は［真実を述べている］彼を追い払うようなことはできない。彼をまさに呼び寄せる。

このように説いた後，JUB は天上界への到達のしかたに関する 4 人の学匠の異説を順次載せている。以下にあげる最初の説では，上述の天上界の入り口にいる「恐ろしい神格」（太陽）は必ず追い払おうとするので，そこを通らずにチャートヴァーラの穴から天上界にいたるべきであると主張されている。

JUB 1.1.5 (1.5) [4] . . . utaiṣākhalā devatāpaseddhum eva dhriyate | [5] asyai diśo divo [']ntaḥ | tad ime dyāvāpr̥thivī saṃśliṣyataḥ | yāvatī vai vediḥ | tāvatīyam pr̥thivī | tad

yatraitac cātvālaṃ khātan tat samprati sa diva ākāśaḥ | [6] tad bahiṣpavamāne stūyamāne manasodgṛhṇīyāt |

[4] …… 結局，この恐ろしい神格は必ず追い払おうとする。[5] この方角に天穹の終わりがある。そこでこの天穹と大地が互いにくっついている。祭場が広がっているのと同じだけ，大地は広がっているのだ。［祭場の北東隅の］このチャートヴァーラが掘られたところ，ちょうどそこに天穹の空隙（太陽）がある。[6] その場所で，バヒシュ・パヴァマーナ［・ストートラ］が歌われつつあるとき，心によって［祭主を］持ち上げるべきである（udgṛhṇīyāt）[54]。

第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの場面であることが明示され，チャートヴァーラという穴が太陽と関係づけられていることから，この説が，上述（**3.2**）のバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラがチャートヴァーラという穴の近くで歌われることに関するブラーフマナの祭式思弁を継承していることがわかる。その祭式思弁に基づいて，詠唱の中で心によって祭主を天上へ持ち上げるという詠唱における心の操作を提唱している。

さらに 3 人の異説を述べたあと，JUB は最後に，「身体（詩節）のないサーマン」の思想的根拠として RV を引用してこの一節を締めくくっている［1.1.7.3–5（1.7.3–5）］。

RV 1.164.45 catvári vák párimitā padáni táni vidur brāhmaṇā́ yé manīṣíṇaḥ |
gúhā trī́ṇi níhitā neṅgayanti turī́yaṃ vācó msnuṣyà vadanti ‖

言葉は四つの足跡（padá，註 18 参照）であると測られている。詩作力のあるバラモンたちはそれらを知っている。三つは隠されていて，彼らは［それらを］動かすことはない。言葉の四分の一を人間たちは語る。

この引用から JUB が「身体（詩節）のないサーマン」を，言葉には人間の日常の言葉を越えた隠された部分があるという RV 以来の言語観につながるものととらえていたことがわかる。詩節を伏せた o vā の繰り返しが，人間に属さない隠された四分の三を表していると理解していたのである。

以上のように，JUB は，ソーマ祭の朝の第 1 詠唱バヒシュ・パヴァマーナ・ストートラを中心とする一連の祭事に関するブラーフマナの祭式思弁を受け継ぎながらも，詠唱で歌われる「身体（詩節）のないサーマン」そのものに焦点をあて，それによる天上界への上昇を理論づけようとしている。そこではブラーフマナの，地上との結び付きを保ちながらのいわば一時的な天上界への上昇から，天上界における永遠の生命を獲得する終極的な天上界への上昇へと思想が展開している。天上界への上昇が祭式の場面におけるものとして描かれながらも，暗々裏

に（祭式の効果としての）死後における天上界へ上昇が意図されていると考えられる。

### 4.2「身体（詩節）のないサーマン」による死後の世界への再生

前述（**1.2**）のように，JUB は詩節を身体（特に骨格，骨）を表すシャリーラ（śarīra）にたとえることによって，詩節（歌詞）を伏せた歌詠と天上界への上昇との関係をより明示的にしている。火葬において，骨以外のものが煙とともに天へのぼっていくのに対して，骨だけは地上に残る。詩節を伏せて歌うことに関して，JUB はしばしば「身体を振り払う」という表現を使うが [1.4.1.4 (1.15.4); 3.7.2.1 (3.39.1)]，同じ表現が火葬の煙に使われていることは注目すべきである [JB 1.49][55]。「身体（詩節）のないサーマン」による天上界への上昇と火葬との結びつきを明瞭に示しているのが，次にあげる一節 3.3.1–4 (3.11–14) である。この一節は，上で取り上げた 1.1.1–7（1.1–7）と同じく，ガーヤトラ・サーマン（o vā o vā o vā hum bhā o vā）の各部分にそったテキスト構成をしているが [Fujii 1987]，1.1.1–7（1.1–7）と異なり，祭主の天上界への上昇が火葬の場でおこることを語る。この一節は最初に，人間が誕生，祭式，死亡の際にそれぞれ死と生を繰り返すことによって三度死に，三度生まれることを説く。

> JUB 3.3.1 (3.11) [1] trir ha vai puruṣo mriyate | trir jāyate | [2] sa haitad eva prathamam mriyate yad retas siktam asambhūtam bhavati | sa prāṇam evābhisambhavati | āśām abhijāyate | [3] athaita[d] dvitīyam mriyate yad dīkṣate | sa chandāṃsy evābhisambhavati | dakṣiṇām abhijāyate | [4] athaitat tr̥tīyam mriyate yan mriyate | sa śraddhām evābhisambhavati | lokam abhijāyate |
>
> [1] 人間は三度死に，三度生まれるのだ。[2] 精液が注がれて，いまだ発生していない状態になるとき，彼は一度目死ぬ。彼はほかならぬ気息へ発生する。彼は空間へ生まれる。[3] 次に潔斎を行うとき，二度目死ぬ。彼はほかならぬ韻律たちへ発生する。彼はダクシナー（祭式の報酬）へ生まれる。[4] 次に死ぬとき，三度目死ぬ。彼はほかならぬ信へ発生する。彼は［天上の］世界へ生まれる。

この冒頭部分は直前の 3.2.3–5（3.8–10）で語られている人間の三度の生と三度の死に関する類似の教説を短い表現で再出したものである。このあと三度の死と生に，ガーヤトラ・サーマンの o vā の三度の繰り返しと地上・中空・天穹の三世界が結び付けられている。

> JUB 3.3.1 (3.11) [5] tad etat tryāvr̥d gāyatraṃ gāyati | tasya prathamayāvr̥temam eva lokañ jayati | yad u cāsmin loke | tad etena cainam prāṇena samardhayati yam abhisambhavati | etāñ cāsmā āśām prayachati yām abhijāyate | [6] atha dvitīyayāvr̥tedam

evāntarikṣañ jayati | yad u cāntarikṣe | tad etaiś cainañ chandobhis samardhayati yāny abhisambhavati | etāñ cāsmai dakṣiṇām prayachati yām abhijāyate | [7] atha tṛtīyayāvṛtāmum eva lokañ jayati | yad u cāmuṣmin loke | tad etayā cainaṃ śraddhayā samardhayati | yayaivainam eta[c] chraddhayāgnāv abhyādadhati | sam ayam ito bhaviṣyatīti | etañ cāsmai lokam prayachati yam abhijāyate ||

[5] そのようなこの三つの転回（o vā）をもつガーヤトラ［・サーマン］を，［ウドゥガートリ祭官は］歌う。それの一度目の転回によって，ほかならぬこの世界とこの世界にあるものを勝ち取る。さらに，［祭主が］そこへ発生する気息によって彼（祭主）を成功（繁栄）させる。そして，彼がそこへ生まれる空間を彼に与える。[6] 次に二度目の転回によって，ほかならぬこの中空と中空にあるものを勝ち取る。さらに，［祭主が］そこへ発生する韻律たちによって彼（祭主）を成功（繁栄）させる。そして，彼がそこへ生まれるダクシナーを彼に与える。[7] 次に三度目の転回によって，ほかならぬあの世界（天穹）とあの世界（天穹）にあるものを勝ち取る。さらに，人々が彼（祭主）を［火葬の］火に置くときにもつ「この者はここ（火）から発生するだろう」[56] という信によって彼（祭主）を成功（繁栄）させる。そして，彼がそこへ生まれるこの［天上の］世界を彼に与える。

1.1.1–7（1.1–7）と同様に，このあと hum bhā によって追ってくる飢えである死を追い払うと述べる。さらに，最後の o vā は Om と Vāc であり，Om は神々の世界である太陽，Vāc は人間の世界である月であり，ウドゥガートリ祭官は Om という音節によって祭主を神々の世界である太陽へ行かせると説く。

最後の o vā によって太陽に送られた祭主（死者）に対して，JUB はさらに以下のような太陽との問答を課している。この問答では，先の 1.1.5（1.5）におけるのぼって来たものと「恐ろしい神格」（太陽のこと）との対話の場合と同じように，やって来たものが自身と太陽（プラジャーパティと同一とされている）との一体性を知っているかどうかが問われている。この箇所のテキストは，JB 1.18 の死者と太陽との問答と（最後の動詞を除いて）まったく同じである[57]。

JUB 3.3.4 (3.14) = JB 1.18 [9,19–26]　[1] taṃ hāgatam pṛchati | kas tvam asīti | sa yo ha nāmnā vā gotreṇa vā prabrūte | taṃ hāha | yas te ['']yam mayy ātmābhūt | eṣa te sa iti | [2] tasmin hātman pratipratta ṛtavas sampalāyya padgṛhītam apakarṣanti | tasya hāhorātre lokam āpnutaḥ | [3] tasmā u haitena prabruvīta | ko ['']ham asmi suvas tvam | sa tvāṃ svargyaṃ svar agām iti | [4] ko ha vai prajāpatiḥ | atha haivaṃvid eva suvargaḥ | sa hi suvar gachati | [5] taṃ hāha yas tvam asi so ['']ham asmi yo ['']ham asmi sa tvam asy

ehīti | [6] sa etam eva sukr̥tarasam praviśati (JB: apyeti) |

[1] やって来た彼に［太陽が］尋ねる,「お前は何者（ka）か」と。名前あるいはゴートラ（氏族名）で自分のことを告げるなら，［太陽は］彼に言う，「私のところにあったお前のこのアートマン（自己），それはお前のものだ」と。[2] そのアートマンが返されると，季節たちが集まってきて，彼の足を捕まえ，彼を引いて連れ去る。昼と夜が彼の世界を得る。[3] 彼（太陽）には，次の［文言］によって告げるべきである，「私は Ka（何者）である。お前は太陽光（suvar）である[58]。そのような私は，天上にある太陽光（svargya svar）であるお前に行きついた」と。[4] プラジャーパティは Ka（何者）[59] なのだ。そしてまさにこのように知っているものが，太陽光へ行くもの（suvarga）[60] である。彼は太陽光（suvar）へ行く（gachati）から。[5]［太陽は］彼に言う，「お前がそれであるもの，私はそれである。私がそれであるもの, お前はそれである。来い」と。[6] 彼はほかならぬ善行の精髄へ入る。

ここでは太陽のもとにあったアートマンが，太陽の質問に対して誤った答えをしたものに返されることが語られている。JB では直前の 1.17 でアグニホートラによってあらかじめ太陽にアートマンを送ることが言われている。それに対して，JUB ではアートマンについてはこの箇所以外では一言も触れられていない。文脈のつながりが不自然であることから，JUB が上に引用した文を JB から借用した可能性が高い。JUB 3.3.1–4 (3.11–14) は，JUB 1.1.1–7 (1.1–7) のソーマ祭における「身体（詩節）ないサーマン」による天上界への上昇を，火葬における死後の再生に移し変え，JB 1.17–18 のアグニホートラによるアートマンの生成と死後の太陽への合一の一節から，死者と太陽との問答の部分を借用して脚色したものと思われる。JB 1.17–18 は，JB 1.46 と JB 1.49–50 とともに二道説の初期の形態を伝えるテキストである（註 66 参照）。アグニホートラや火葬を内容とする JB 1.1–65 は，JB の補遺的な性格をもち，比較的成立が遅いと考えられている[61]。JB 1.17–18 が JUB のこの一節に先行する可能性が高いことは, JUB（少なくとも JUB 第 3 章）の成立時期に関して示唆をあたえる。

上の箇所のあとの結びの部分は, それぞれの本来の文脈に応じて JB と JUB で異なっている。JB では, 太陽に入ったものの息子たちは彼の遺産（dāya）に, 祖霊たちは彼の善行（sādhukr̥tyā）にそれぞれ与るとされ, 以上のことを知るものは二つのアートマン（母胎から生まれるものと，アグニホートラによって太陽のところに生じるもの）と二つの遺産（息子たちへの遺産と祖霊たちへ与えられる善行）をもつと言われる。JUB では，胎児の食べ物が母親の乳房にのぼるように，この世での祭式と善行が食べ物として上にあがって月に入るとされ，ウドゥガートリ祭官は最後の o vā において，Om によって太陽に行かせた祭主（死者）に，Vāc によって食べ物である月を与えることが語られている。

以上考察してきたように，JUB はブラーフマナのバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラをめぐる諸祭事に関する祭式思弁を継承しながら，「身体（詩節）のないサーマン」そのものによる天上界への上昇と永遠の生命の獲得へと思想を深化させ，さらに「身体（詩節）のないサーマン」による天上界への上昇を火葬と結びつけ，祭主の死後における天上界での再生へと思想を発展させている。JUB はこのほかにもさまざな内容の再生説を展開している。上で取り上げた箇所のようにサーマンに関連づけて説くものもあれば，サーマンから離れて再生説そのものを展開しているものもある。本論文では詳しくは取り上げないが，後期ブラーフマナと初期ウパニシャッドの間に位置する JUB で展開されている発展途上の再生説の諸相には，輪廻思想の形成過程について貴重な情報が含まれている[62]。

## 5. JUB と『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』（ChU）

### 5.1 JUB と ChU の関係：テキスト，思想，祭式

前述のようにサーマ・ヴェーダには，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派とジャイミニーヤ派の二つの系統がある。前者に属する『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』（ChU）と後者に属する JUB には，テキストと内容の面で密接な関係がある。特に ChU 全 8 章のうち最初の 2 章には，JUB との対応箇所が多くあり，ChU のその部分が JUB の異本の観を呈していることは，かつてルヌー（L. Renou）が指摘したところである [Renou 1953: 140, n. 3]。ChU の最初の 2 章に対応箇所が見られるのは，JUB の同じく最初 2 章であり，ChU 第 3 － 4 章にも，数は多くないが JUB 第 3 － 4 章との対応箇所が見られる。このことは，JUB と ChU がある程度並行的に成立していったことを示唆している［藤井 1989: 14; Fujii 1997: 90］。

JUB と ChU との対応箇所[63] の中で，両文献の成立の前後関係を明瞭に示すものとして，JUB 3.1.1–2（3.1–2）と ChU 4.1–3 がある。前者は，火や太陽などの宇宙的諸存在と，言語機能や視覚などの生体諸機能をそれぞれ呑み込む最高存在であるヴァーユ（風）とプラーナ（気息）を説く一節である [Fujii 1989: 1002ff.]。ChU は JUB のこの一節を素材にして，欲深い王を揶揄する滑稽話を作り上げている。そこでは，パウトラーヤナという名の王が，賭博で「すべてを取り込む（一人勝ちをする）」方法が知りたくてライクヴァ仙を探し出すが，ライクヴァ仙が王に語ったのは，王の期待に反して「すべてを取り込む」ヴァーユ（風）とプラーナ（気息）の教説であったというものである[64]。

JUB と ChU に加えて，ChU と並んで初期散文ウパニシャッドを代表する『ブリハッド･アーラニヤカ・ウパニシャッド』（Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad [BĀU]）の関連箇所との前後関係をも示すものとして，JUB の第 1 章の最後の節から第 2 章にかけて 繰り返されるプラーナ（気息）の教説がある。プラーナが人間の生体諸機能の中の最高のものであることを，神々とアスラ（悪

魔）たちとの争いのモチーフの中で説くものである。この教説は，JUB において連続した 4 つのバージョンとして繰り返されるとともに，類似の内容のものが BĀU と ChU にそれぞれ別のバージョンとして現れている：① JUB 1.18.5 (1.60); ② JUB 2.1.1–2 (2.1–2); ③ JUB 2.2.1–2.3.3 (2.3–9); ④ JUB 2.4.1–3 (2.10–12); ⑤ BĀU 1.3; ⑥ ChU 1.2。これら 6 つのバージョンのテキスト分析によって，それらが以下のように成立したことが判明している：(1) JUB の 4 つのバージョンは現在のテキストの順に先行するバージョンを踏まえて順次成立した；(2) BĀU 1.3 は JUB の最後のバージョンである JUB 2.4.1–3 (2.10–12) にきわめて近く，それをもとに成立した可能性が高い；(3) もっとも短いバージョンである ChU 1.2 は，BĀU 1.3 と共通の表現をもっていて近い関係にあるが，JUB のバージョンとも直接的なつながりが見られ，最後に成立したと考えられる [Fujii 1999]。なお，全般的に BĀU 自体には JUB との直接的な対応がほとんど見られない。その意味でこの箇所は，テキストの分析から JUB，ChU，BĀU の対応部分の前後関係を知ることのできる貴重な資料となっている。

テキストの前後関係のほかに，ChU の言語的特徴[65]と，ChU に見られる発達した再生説（ChU と BĀU が共有するいわゆる五火二道説）[66] や，ブラフマン神[67] のような比較的後代に登場する神格への言及が，ChU が JUB に遅れて成立したことを示している。

JUB と ChU の関係において注目すべきは，JUB の「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンに関する箇所については（註 25，26，27，28 参照），ChU に対応するものが見られないことである。ChU はガーヤトラ・サーマンを特に重要視することはなく，それの「身体（詩節）のない」形に対しては一言の言及もない。このことは，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派が自分たちの最初のウパニシャッド文献を作る際に，模範としたジャイミニーヤ派のウパニシャッド（JUB）の中心テーマを意図的に捨て去ったことを意味している。ガーヤトラ・サーマンに対する JUB と ChU の扱いの違いの背景として，それらが成立したときに所属学派が保持していたサーマンの伝統の違いがある。上述（**2.1**）の JB で導入されたバヒシュ・パヴァマーナ・ストートラの変形詩節（dhur）について，ジャイミニーヤ派のシュラウタ・スートラ（JŚS）にはその規定が存在しないので，ジャイミニーヤ派では比較的早い時期に用いられなくなり，JUB が提唱する「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンに完全に取ってかわられたと思われる。それに対して，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派は ṢaḍvB において変形詩節（dhur）を遅れて採用したが，のちのシュラウタ・スートラ（LŚS–DŚS）においてもそのまま保持し続けている。おそらく，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派に「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンが導入されたのは，ChU よりもずっと後のことである[68]。ChU に「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンへの言及がまったくないのは，そのためと思われる[69]。

### 5.2 ヴェーダ学習誓戒における JUB と ChU

ChU が JUB と異なり，ガーヤトラ・サーマンとの特別な結びつきをもたないことは，両文献の間で，所属学派が保持するサーマンとの関係性が異なることにも起因している。このことを明瞭に示すのが，ヴェーダ学習に関わる誓戒（vrata，以下「ヴラタ」）と学習すべき対象が，サーマ･ヴェーダの二つの学派で微妙に違っている事実である。ヴェーダ学生（ブラフマチャーリン）がヴェーダを学習するときに，各テキストに対して特定のヴラタを守るべきことがグリヒヤ･スートラに規定されている。サーマ･ヴェーダ所属のグリヒヤ･スートラもサーマ･ヴェーダの学習に関して一定のヴラタと各ヴラタに対応する学習対象を定めている[70]。

ジャイミニーヤ派のグリヒヤ・スートラ（Jaiminīya-Gṛhyasūtra [JGS]）は，サーマンの学習に関するヴラタとそれに対応する学習対象を以下のように規定している。「ヴラーティカ（vrātika）［・ヴラタ］ではヴラタ・パルヴァン（vrataparvan）を，アーディティヤヴラーティカ（ādiyavrātika）［・ヴラタ］ではシュクリヤたち（śukriyāni）を，アウパニシャダ（aupaniṣada）［・ヴラタ］ではウパニシャッド（upaniṣad）を聞かせる（学ばせる）べきである」（JGS 1.16: 15,8–9）[71]。これらのヴラタの学習対象に相当するものが，同派の歌曲集（Gāna）の一つである『ジャイミニーヤ・アーラニヤ・ガーナ』（Jaiminīya-Āraṇyagāna [JĀrG]）に収録されている。JGS のヴラタの規定と JĀrG に収録されているサーマンを対応させると以下のとおりである。

| JGS | | JĀrG |
|---|---|---|
| ヴラタ | 学習対象 | サーマン |
| vrātika | vrata-parvan | vrata-parvan |
| | | arka-parvan |
| | | dvandva-parvan |
| ādityavrātika | śukriyāṇi | śukriya-parvan |
| | | śākvara-parvan |
| aupaniṣada | upaniṣad | aupaniṣada parvan |

近年までヴェーダ学習のヴラタを守ってきた南インド・ケーララ州のジャイミニーヤ派において，aupaniṣada-vrata「ウパニシャッドに関係するヴラタ」では JUB が学習されてきたことから [Fujii 2012: 113f.]，JGS が aupaniṣada-vrata の学習対象としている upaniṣad は，JUB をさすと思われる。他方，JĀrG は，このヴラタに対応するものとして aupaniṣada parvan「ウパニシャッドに関係するセクション」という名のもとに複数のサーマンを集めている。aupaniṣada parvan の最後に，ガーヤトラ・サーマンが，詩節を伴う形と詩節を伴わない形の両方で収録されている（詩節にはサーヴィトリー詩節 [JS 4.3.8 < RV 3.62.10] が用いられてい

る）[72]。これらのことを総合すると，ジャイミニーヤ派では，aupaniṣada-vrata においては，JUB とともに，「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンを最後とする aupaniṣada parvan が学習されていたと考えられる。

カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派のヴェーダ学習のヴラタと学習対象については，カウトゥマ派の『ゴービラ・グリヒヤ・スートラ』（Gobhila-Gṛhyasūtra [GobhGS] 3.1.28）に対するナーラーヤナ・バッタ（Nārāyaṇa Bhaṭṭa）による注釈に記載されている。そこでは，aupaniṣada-vrata で学ばれるものとして ChU が upaniṣadbrāhmaṇa という名で指定されている（註 84 参照）[73]。ところが不思議なことに，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の『アーラニヤ・ガーナ』（K-R ĀrG と略記する）には，aupaniṣada-vrata に対応する aupaniṣada parvan がなく，学ぶべきサーマンは配されていない。上と同じようにヴラタの規定とサーマンを対応させると以下のとおりである。

| GobhGS 注 | | K-R ĀrG |
|---|---|---|
| ヴラタ | 学習対象 | サーマン |
| vrātika | āraṇyaka（śukriya 以外） | arka-parvan |
| | | dvandva-parvan |
| | | vrata-parvan |
| ādityavrta | śukriyāṇi | śukriya-parvan |
| aupaniṣada | upaniṣadbrāhmaṇa | ———— |
| jyaiṣṭhasāmika | ājyadohāni | ājyadohāni |

このようにカウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派では，aupaniṣada-vrata で学ばれるのは ChU だけであり，特定のサーマンが学習対象になってはいない。ヴェーダ学習のヴラタにおける両文献とサーマンとの関係からも，ChU が JUB と異なり，特定のサーマンとの結びつきがないことが確認される。なお，グリヒヤ・スートラは JUB や ChU よりも成立が遅く，グリヒヤ・スートラに規定されているヴラタが，同じ形で JUB や ChU の時代に存在していた確証はない。ただ，『アーラニヤ・ガーナ』あるいは少なくともそこに見られるサーマンの名称・配列は古く，すでに後期のブラーフマナ文献には知られていたと考えられている［Caland 1931: IX–XVII; 辻 1981 (1948): 325; 338f., n. 42］。

このように，JUB を作り出したのがほかならぬジャイミニーヤ派であった背景には，この学派がガーヤトラ・サーマンを特に重視したことがある。ジャイミニーヤ派が他学派に先んじる形でガーヤトラ・サーマンに対する新機軸をつぎつぎに進めてきたことは，先に論じたとおりである（**2.** 参照）。

## 6. ウパニシャッドとしての JUB

### 6.1　ジャイミニーヤ派における JUB の位置づけ

JUB は，ヴェーダーンタ学派から KenaU の部分以外はウパニシャッドと見なされなかったことも影響してか，研究においてもヴェーダ文献の中での位置づけが不安定であった[74]。ウパニシャッドに含められることもあれば［Limaye & Vadekar 1958 など］，逆にブラーフマナに含められることもあるが［Belvalkar & Ranade 1927: 33; Sharma 1967: 9ff. など］，より多くの場合は，両者の中間としてアーラニヤカに属する文献とされてきた［Renou 1947: 106; 辻 1967: ヴェーダ文献一覧表（折込）; Gonda 1975: 431f. など］。ボーデヴィッツ（H. W. Bodewitz）は，JUB 冒頭の一節 [1.1.1–7 (1.1–7)]（**4.1** 参照）を分析する論文で，はじめに JUB のジャンル分けの問題について考察している。JUB は祭式を系統的に扱ってはいないのでブラーフマナではなく，祭式そのものへ強い関心を示しているのでウパニシャッドではないとして，「アーラニヤカの一つといってよい（an Āraṇyaka it may be）」と判断している [Bodewitz 1986: 32f.]。ただ,「アーラニヤカ」と称される文献は，ブラーフマナ文献の一種の補遺文献として，ブラーフマナ文献で扱われていない祭式を扱う祭式文献である。リグ・ヴェーダ所属のアーラニヤカではマハーヴラタ祭，ヤジュル・ヴェーダ所属のものではプラヴァルギヤ祭など，アーラニヤカが扱うのは秘儀的なものが多い[75]。それに対して，JUB はサーマンの意義付けを中心にするとはいえ，それにとどまらない哲学的な思弁をも展開している。ウパニシャッドというジャンルの枠を, ボーデヴィッツが考えるよりも広く取れば, JUB をウパニシャッドに含めることは可能である[76]。ここでは，JUB の文献としての分類を考えるための材料として，JUB がジャイミニーヤ派の伝承において文献としてどのような位置をしめていたのかを概観する。

現在，ジャイミニーヤ派のサーマ・ヴェーダ伝承は，南インドのタミル・ナードゥ州とケーララ州の二つのジャイミニーヤ派に（より正確には，タミル・ナードゥ州内およびケーララ州のタミル・ナードゥとの州境のタミル人のジャイミニーヤ派と，ケーララ州のナンブーディリと称される土着バラモンのジャイミニーヤ派に）分かれて存続していて，伝承の内容と形態も少なからず異なっている。JUB もタミル・ナードゥとケーララでは違う形で伝承されている[77]。タミル・ナードゥ州のジャイミニーヤ派（以下，タミル・ジャイミニーヤ派）では，JUB は，JUB を含む広義のブラーフマナの最終部分に位置している。タミル・ジャイミニーヤ派に属する JB の写本の奥付によれば，ジャイミニーヤ派のブラーフマナは以下の 8 つのテキスト区分からなっている[78]。

1. Mahābrāhmaṇa（= JB 1.1–65; 66–364）
2. Dvādaśāha（= JB 3.1–386）

3. Mahāvrata（= JB 2.371–442; 2.1–80）[79]
4. Ekāha（= JB 2.81–234）
5. Ahīna（= JB 2.235–333）
6. Sattra（= JB 2.334–370）
7. Ārṣeya（= Jaiminīya-Ārṣeya-Brāhmaṇa）
8. Upaniṣad（= Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa）

これらの８つのテキスト区分のそれぞれは,「章」ほどの意味で「～・ブラーフマナ（brāhmaṇa）」と呼ばれていたと考えられる。Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa という名称は，タミル・ジャイミニーヤ派のこのテキスト区分に由来する[80]。

現在のタミル・ジャイミニーヤ派では，JUB 自体の伝承は弱体化（ほぼ消滅）し，現存する写本も散逸している。現在のタミル・ジャイミニーヤたちに取材したところでは, 彼らにとって Upaniṣad は JUB 全体ではなく，その一部の KenaU（JUB 4.10.1–4 [4.18–21]）である。おそらく伝承の弱体化した JUB に代わって，ヴェーダーンタの影響のもと KenaU を自派のウパニシャッドとみなすようになったと思われる。

一方，ケーララ州のナンブーディリ（土着バラモン）のジャイミニーヤ派（以下，ナンブーディリ・ジャイミニーヤ派）では, JUB は Jaiminīya-Upaniṣad という名の独立したウパニシャッドとして伝承されている[81]。ナンブーディリ・ジャイミニーヤ派では，近年までサーマ・ヴェーダ修得課程において，前述の aupaniṣada-vrata の期間に JUB が学習されてきた（実際には一部を朗誦するのみ）[Fujii 2012: 113f.]。派内の子弟のヴェーダの修得課程に組み込まれていたために，JUB はタミル・ジャイミニーヤ派におけるよりもはるかに良好に伝承されてきた。おそらく同じ理由で，JUB の写本がナンブーディリ・ジャイミニーヤ派家系に多く保有されている[82]。

### 6.2　ウパニシャッドである基準

JUB を最初のウパニシャッドと考える場合に問題となるのは，何を基準にウパニシャッドであると判断するのかである。伝統的には，ウパニシャッドの統一的解釈と体系化を行おうとするヴェーダーンタの学匠たちが，ヴェーダ文献の中から学派の枠を越えて対象として選び出したものがウパニシャッドとされている。選び出された文献は, やがて本来所属していたヴェーダ学派の文献伝承から切り離されて，独立した純粋な哲学書として扱われ，シャンカラをはじめとするヴェーダーンタの思想家たちによって注釈を加えられるとともに，彼らの思想展開の材料として利用された［cf. 中村 1981 (1950): 146ff.; Olivelle 1998: 10］。その後，ウパニシャッドの名声の高まりとともに，あらたに多くの文献がヴェーダの外部でウパニシャッドという名で次々

に生み出され，やがてそれらと，もともとヴェーダに所属していたウパニシャッドとがいっしょに集められ，100を超えるウパニシャッドからなるコレクションが誕生することとなった。19世紀末以降，ウパニシャッドとして集められた多数の文献に対して学問的な分析が行われるようになり，言語と内容から後代に成立したと考えられる多くのものが新ウパニシャッドとして除外され，残りの14の文献がヴェーダのウパニシャッド（いわゆる古ウパニシャッド）として確定することになった［Deussen 1919: 22ff.; cf. 中村 1981 (1950): 14ff.: 辻 1967: 158f.］[83]。ウパニシャッドへの分類がこのような経過をたどったために，そこに分類された文献とその文献を生み出したヴェーダの学派伝統との関係が曖昧になるとともに，JUBのようにウパニシャッドへの分類から落ちてしまう文献も生じたのである。

ウパニシャッドであるための基準は，何よりも当該文献を生み出したヴェーダ学派における正典成立史における位置づけと，その文献が学派内で時代を通して継承される正典の伝承過程における位置づけである。学派における成立史と伝承過程において，JUBとChUは，ジャイミニーヤ派とカウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派において並行的な位置づけを有している[84]。成立史に関しては，JUBとChUは，［JB古層：PB］と［JB新層：ṢaḍvB］の後にそれらに続いて成立した[85]。伝承過程においては，前述のようにJUBとChUはともに，サーマ・ヴェーダ修得課程のaupaniṣada-vrataに関係する学習対象として同じように学ばれてきた。このようにJUBはChUと同じく，所属ヴェーダ学派においてウパニシャッドとして成立し，ウパニシャッドとして伝承されてきたことから，ウパニシャッドである基準を満たしていると考えられる。文献ジャンルとしてのウパニシャッドがヴェーダ文献史のどの段階で確立されたのかについては，十分に解明されていないが，JUBはChUと同じくヴェーダの学派内でウパニシャッドとして扱われてきたことは明らかである。

ただし，ヴェーダ文献史全体から見ると，JUBは近い性格をもつ文献グループの中に入り，このグループの文献は学派によってアーラニヤカと呼ばれたり，ウパニシャッドと呼ばれたりしている。この違いは内容の中心が祭式と哲学的思弁のどちらにあるかとともに，その文献がヴェーダ学習課程のどの段階と結び付けられているかによると思われる[86]。JUBやChU以外に，リグ・ヴェーダ所属アイタレーヤ派の『アイタレーヤ・アーラニヤカ』（『アイタレーヤ・ウパニシャッド』を含む），リグ・ヴェーダ所属カウシータキ派またはシャーンカーヤナ派の『カウシータキ（またはシャーンカーヤナ）・アーラニヤカ』（『カウシータキ・ウパニシャッド』含む），黒ヤジュル・ヴェーダ所属カタ派の『カタ・アーラニヤカ』（『カタ・シクシャー・ウパニシャッド』を含む），白ヤジュル・ヴェーダ所属ヴァージャサネーイン派の『ブリハッド・アーラニヤカ・ウパニシャッド』などがそれである。このようにヴェーダ学派においては，ウパニシャッドという名称は第一義的にヴェーダの学習課程に依拠したものと考えられるため，その名称をもたない文献にも同等の性格を有するものがあることも留意する必要がある[87]。

JUB がそれらの文献の制作と連動する形で作り出されていったことは，それらの文献との間に多くのパラレルや対応が見られることからもうかがわれる［cf. 藤井 1989: 15ff.; Fujii 1997: 92ff.］。学派間の相互影響のもと，ブラーフマナに続く文献が生み出されていく中で，サーマ・ヴェーダ歌詠の新機軸である「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンを中心テーマとして JUB が作られていった。作成された JUB はそのサーマンを学ぶための必修文献として，「ウパニシャッド」という名でサーマ・ヴェーダの修得課程の中に組み入れられたものと思われる。

## お わ り に

サーマ・ヴェーダのジャイミニーヤ派は，サーマンの中でも特にガーヤトラ・サーマンを重視し，JB の古層から新層にかけてさまざまな新機軸を生み出してきた。そして最後の形として「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンを完成させることになった。ヴェーダ後期にそれぞれのヴェーダ学派においてブラーフマナ文献に続く新たな文献制作への動きが起こる中で，ジャイミニーヤ派が「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンを中心のテーマとして新たな文献として作り出したのが JUB である。JUB はこのサーマンを意義づけるために，それ以前のブラーフマナのソーマ祭の朝の詠唱をめぐる祭式思弁を踏まえて，「身体（詩節）のない」サーマンそのものによる天上界への上昇の説を編み出すとともに，サーマンと関連づけて，あるいはサーマンから離れて，再生説をはじめとするさまざまな内容の哲学思弁を展開している。ジャイミニーヤ派のこの新しい動きが，同じくサーマ･ヴェーダに属するカウトゥマ･ラーナーヤニーヤ派に影響を与え，同様の文献である ChU を作らせることになった。しかしその際，サーマンの伝統の違いから，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派が「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンに対する思弁を，サーマン一般に対する思弁に巧みに作りかえたことは，例えば JUB と ChU の聖音 Om に関する議論の違いに端的に示されている。JUB の冒頭の Om 論が，o vā o vā o vā という「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンの実際の形の上に組み立てられているのに対して，ChU 冒頭は，Om があらゆるウドゥギータ（詠唱の主唱部）のはじめに発せられることに基づいて，Om の意義を普遍的に論じている。

JUB がジャイミニーヤ派においてウパニシャッドとされてきたことは，JUB の教義が本文の中で「ガーヤトラについてのウパニシャッド」と称されていることと，JUB が後代のジャイミニーヤ派の注釈文献の中で「ガーヤトラ・ウパニシャッド」という名で言及されていることに加えて，派内のサーマ・ヴェーダの学習課程において aupaniṣada-vrata の期間に学ばれてきたことからも明らかである。ただ，KenaU の部分を除いてヴェーダーンタの思想家たちに真正のウパニシャッドと認められなかったために，JUB はジャイミニーヤ派の伝承の奥にとどめられて，学派の壁を越えて広く流布するにはいたらなかった。19 世紀の後半にバーネル

によってジャイミニーヤ派の写本が発見されるまで，一般にはその存在すら知られていなかったことは，学派と時代を越えて名声と評価を享受し続けてきたChUと対照的である。しかしJUBが，ウパニシャッドと称されるにいたる新しいジャンルの最初の文献として創作され，先駆けとしてその後のウパニシャッドの成立に影響を与えた意義は，正しく評価されるべきである。

**註**

1） ウパニシャッドについては，Deussen［1919］をはじめとして参考にすべき文献は多い。その中で，古い著作ではあるが，ブラーフマナ，アーラニヤカなどの前ウパニシャッド文献を含めたヴェーダ文献史の視点からウパニシャッドを解説しているものに，Belvalkar & Ranade［1927］がある。註87参照。

2） サーマ・ヴェーダの学派と文献に関しては，Caland［1907: 1–36; 1931: i–ix］; 辻［1981（1948）: 319–330］; Renou［1947: 87–129］; Parpola［1968–1969: I: 1, 29–96; 1973］; Howard［1977: 10–14］などを参照。

3） Saṃhitā，PB，ṢaḍvBはほぼ同じ形のものを伝承している。シュラウタ・スートラについては，カウトゥマ派のLŚSとラーナーヤニーヤ派のDŚSはほぼ同一であるが，後者はテキストを若干追加している。グリヒヤ・スートラについては，両派はそれぞれ独自のGobhGSとKhādGSを有している。Caland［1931: i–ix］参照。ChUは両派に共通していると考えられるが，ラーナーヤニーヤ派のChUに関しては信頼できる情報が得られていない。カウトゥマ派のChUについては，註84参照。

4） Burnellによるジャイミニーヤ派写本群の発見とそれに始まるジャイミニーヤ派諸文献の研究については，Parpolaによる総覧 がある［Parpola 1973］。現在のタミル・ナードゥ州とケーララ州のジャイミニーヤ派の伝承については，Fujii［2012］を見よ。

5） ジャイミニーヤの別称であるタラヴァカーラ（Talavakāra）については，Burnell［1878: vi–viii］; Renou［1947: 92, n. 1］; 辻［1981（1948）: 334, n. 19］; Parpola［1973: 9］参照。

6） Oertelの原典はデーヴァ・ナーガリー文字に移されて，Rama Devaによってインドで複製出版されるとともに［Oertel 1921］，LimayeとVadekarによる主要ウパニシャッド集に収録されている［Limaye & Vadekar 1958: 377–474］。その後，Sharmaが新たな写本を加えて原典の再校訂を行っている［Sharma 1967］。ただし，Sharmaの校訂版はKena-Upaniṣad以降の部分4.10.1 (4.18)–4.12.2 (4.28)を欠いている［cf. Parpola 1973: 8］。筆者は1980年代半ばから（特に2002–2006年に集中的に）Parpolaと共同でジャイミニーヤ派写本の調査と収集を行った［Fujii & Parpola 2016］。入手したすべての写本をもとにJUBの新しい校訂版を近く出版する予定である。本稿における原文の引用は出版予定の新校訂版からのものである。

7） 例えば，シャンカラのBrahmasūtra 3.3.25に対する注釈を参照。シャーティヤーヤナ派（ジャイミニーヤ派）のJUB 4.1.1 (4.1)などは「vidyā（明知）を主題とするウパニシャッドのテキスト（vidyāpradhāna upaniṣadgrantha）」の近くに位置するが，「それらはvidyāには含まれない（naiṣām upasaṃhāro vidyāsu）」という。Witzel［1977: 145］は，ジャイミニーヤ派をシャーティヤーヤナ派から派生した別学派とみて，JUBのKenaUの部分4.10.1–4 (4.18–21) 以下をジャイミニーヤ派の付加と考えている。そのため，シャンカラのいう「vidyāを主題とするウパニシャッドのテキ

スト」をその前の 4.8.1–4.9.2 (4.11–17) と解釈している。しかし後述のように，その部分は JUB 本体の中心テーマに関っているため，「vidyā を主題とするウパニシャッドのテキスト」としては KenaU が意図されていると考えるべきである。藤井［1989: 19; 23, n. 25］; Fujii［1997: 96］参照。

8） JUB のテキストを加えている Limaye & Vadekar［1958］を除いて，これまでに出版されているウパニシャッドの原典集や翻訳集には JUB は含まれていない。JUB に焦点をあてた研究としては，次註にあげる筆者のもの以外には，Buitenen［1959］; Deshpande［1980］; Bodewitz［1986］; Howard［1987］などにどどまる。

9） JUB の内容を分析したものとしては，Fujii［1984; 1987; 1989; 1991; 1997; 1999］; 藤井［1989; 1996］，関連する祭式，歌詠，思想の研究としては，Fujii［1986; 2001; 2009–2010; 2011］; 藤井［1990; 1995］。

10） 出版されたテキストでは，各 khaṇḍa 内は校訂者や編者たちによって便宜的に段落に分けられて番号が振られているが，写本に基づいたものではない。Oertel［1894］は，anuvāka の区分を無視して，khaṇḍa の区分に通し番号をうっている。例えば，1.2.1 は Oertel の版では 1.8 となる。Oertel による番号もこれまでの研究者たちによって使用されているので，本稿では 1.2.1 (1.8) のように括弧内に併記し，khaṇḍa 内の段落分けは Oertel のものを用いる。

11） 第 3 の部分の三つの小テキストについては，藤井［1996: 835–833 (114–116)］を見よ。

12） 中性名詞「ブラフマン（bráhman）」は，詩作によって「形成された言葉」‘(dichterische) Formulierung’［Thieme 1952］を原義とするが，やがてヴェーダの宗教思想における最高存在を意味するようになる。後期ヴェーダ文献では中性名詞のままで人格神のような存在として描かれることがある。この語はアクセントの位置をかえて男性名詞（brahmán）にもなり，古くは「（詩句の）形成者，詩人」［cf. Brereton 2004］，のちには「ブラフマン祭官」「ブラフマン神」を意味するに至る［cf. 藤井 印刷中］。註 67 参照。

13） Bhavatrāta は JUB 1.6–7 (1.20–24) について『前ガーヤトラ・ウパニシャッド』の第 6・第 7 anuvāka として言及している：pūrvasyā gāyatropaniṣadaḥ ṣaṣṭhasaptayor anuvākayoḥ . . .（Bhavatrāta on JŚS 1.11 [Shastri 1966: 41,16]）．ここ以外に JŚS 第 1 部の範囲で JUB は，śruti / śrūyate / śrūyamāṇa（4），brāhmaṇa（2），upaniṣad（2），veda（1），grantha（1），etadanuvāka（1），ādau（1）という表現で Bhavatrāta に引用もしくは言及されている（数字は箇所数）。この中の brāhmaṇa は JUB を含む広義の JB の可能性がある（**6.1** 参照）。

14） Bhavatrāta の年代について Parpola［1986: 83］は，Daṇḍin（7–8 世紀頃）がその著 Avantisundarīkathā の中で，著名なヴェーダの注釈者 Bhavarāta（まま）の息子で，ケーララからやって来た Mātṛdatta という名の学匠に会ったと語っていることから，7 世紀としている。Bhavatrāta は JŚS 注釈の冒頭の韻文で，父の名が Mātṛdatta であることを伝えている［Shastri 1966: 2,3］。ケーララの習慣では長男は父方の祖父の名前を引き継ぐので，Bhavatrāta の息子の名前が Mātṛdatta であった可能性がある。Fujii［2012: 102, n. 10］参照。

15） この造語法については，Wackernagel & Debrunner［1930–1957: II 2, 402］参照。ガーヤトラ・サーマンについては，Fujii［2009–2010: 1f., n. 1］を見よ。

16） 辻［1981 (1948): 338, n. 38］; Howard［1983］; Fujii［2009–2010: 1f., n. 1］参照。サーヴィトリー詩節とその後の展開については，Kajihara［2018–2019］参照。

17） śárīra は単数では身体（特に骨格）をさし，複数ではその部分である骨を意味する。

18） padá は「足跡」のちに「単語」をも意味する。páda「足，詩節の行」（< pád「足」）との混同からか，あるいは「足跡」の意味展開からか，padá はブラーフマナではしばしば（SV 所属のブラー

フマナではほとんどが）詩節の行を意味している。例えば，JB 1.248［102,13］navaitā bahiṣpavamānyo bhavanti. tāsāṃ saptaviṃśatiḥ padāni.「Bahiṣpavamāna-stotra には例の 9［詩節］が用いられる。それらの［詩節］は 27 pada をもつ。」Cf. JB 1.206; 208; 286; 289; 290; 2.48; PB 9.1.4; 16; 19; 15.12.7; 16.11.10; ṢaḍvB 3.1.20; etc. なお，JB の原文引用には，Raghu Vira & Lokesh Chandra［1954］のほか，Ehlers によるデジタル校訂版（未出版）をも参考にしている。

19）おそらく後述（**1.3**, **1.4**）の，朝の詠唱で繰り返し発せられる o vā のこと。JUB 1.1.3.2 (1.3.2) において，三度繰り返される o vā という音を，Om と Vāc，あるいは両者と同置された火と大地，風と中空，太陽と天穹になぞらえて両神格（devate）と呼んでいる（**4.1** 参照）。

20）「詩節のないサーマン」（anṛca sāman）という語は，「朝のソーマ搾り」の第 1 詠唱（後述）の文脈で JB 1.259［108,3–5］（≈ ṢaḍvB 2.1.1）にも現れる：yad ṛcam asāmnīṃ gāyed asthy eva jāyeta na māṃsam. yat sāmānṛcaṃ gāyen māṃsam eva jāyeta nāsthi.「もしサーマンのない詩節を歌うなら，骨だけが生まれ，肉は［生まれ］ないだろう。もし詩節のないサーマンを歌うなら，肉だけが生まれ，骨は［生まれ］ないだろう」。このように JB ではその歌い方は否定されていて，JB と JUB とでガーヤトラ・サーマンの歌い方が異なることがわかる。詳しくは **2.1** で論じる。

21）この一節は辻直四郎によって Keśin Dārbhya 研究の中で翻訳されている［辻 1977: 244–247; 1978: 128–130］。ただし，祭式歌詠上の背景については考察されていない。

22）筆者は JB の記述をもとに Bahiṣpavamāna-stotra の古い詠唱の形を復元している［Fujii 2009–2010: 7–18］。それが JUB によって新たに提唱されたものとは異なっていることについては後述する（**2.1**, **2.2**）。アグニシュトーマ祭の詠唱に関する後代の資料としては，未出版の Jaiminīya Agniṣṭomaprayoga という補助文献の写本が Oriental Institute, Baroda に所蔵されている（No. 286; Acc. No. 10881 [B]）［未見］。Śrautakośa［Kashikar 1970］に記載されているジャイミニーヤ派の Bahiṣpavamāna-stotra の詠唱形は，これに基づいたものであり［Kashikar 1970: 13］，Staal が記録した形とほぼ同じである。この文献については，Parpola［1973: 15, n. 1; 18］をも参照。

23）prastāva, udgītha, pratihāra, upadrava, nidhana は詠唱詩節の区分（bhakti）である。Staal は prastāva のあとの o vā o vā o vā hum bhā o vā を分割して，udgītha, pratihāra, upadrava, nidhana に配分しているが，彼はのちにこれを訂正して，そのすべてを udgītha とし，ウドゥガートリ祭官によって歌われるとしている［Staal 1983: I, 603; cf. Fujii 1986: 15f.］。なお，通常の詠唱における詩節の区分と祭官の担当については，Fujii［2009–2010: 10, n. 30］を見よ。

24）朝の第 1 詠唱（Bahiṣpavamāna-stotra）の第 1 詩節では hum bhā は発声されない（JB 1.101; 259; 315; JŚS 1.11;「心の中で思念する」JB 1.101）。Staal［1983: I, 603］; Fujii［1986: 13f.］参照。第 1 詩節はソーマ祭における再生の観念に基づいて retasyā「精液の［詩節］」と呼ばれ，hum bhā を発声しないのは，精液を切断しないためと説明されている（JB 1.100; 259; 315）［Fujii 2009–2010: 10］。ヴェーダ祭式，特にソーマ祭における再生の観念については，Fujii［2011: 112f.］を見よ。

25）1.1.1–7 (1.1–7); 1.4.1–3 (1.15–17); 3.3.1–4 (3.11–14); 3.6.1–3 (3.29–31); 3.7.1–5 (3.38–42); 4.8.1–4.9.2 (4.11–17).

26）1.1.2.3 (1.2.3); 1.1.3.1 (1.3.1); 3.7.2.1 (3.39.1); 4.6.3.9 (4.8.9); 4.8.4.2 (4.14.2).

27）2.1.2.7 (2.2.7) prāṇā3 prāṇā3 prāṇā3 hum bhā o vā; 3.2.1.4 (3.6.4) dadā3 tathā3 hantā hum bhā o vā.

28）1.1.4.6 (1.4.6) hum bhā o vā; 1.2.2.1=1.4.3.1 (1.17.1) o vā o vā; 3.2.5.10 (3.10.10) om, vāc, hum, bhā; 3.3.3.4 (3.13.4) hum bhā o vā; 4.6.3.6 (4.8.6) oṃ vāc, oṃ vāc, oṃ vāc, hum bhā oṃ vāc.

29）詠唱（stotra）では，おもに 3 詩節からなる paryāya「回，繰り返し」の開始ごとに him あるい

は hum が発せられるが，Bahiṣpavamāna-stora は連続した 9 詩節からなり，paryāya がないので，him あるいは hum の発声は 1 回だけである。

30） サーマ・ヴェーダ文献において anirukta は，詩節の音節を不分明にしたり，o などの単音に置き換える歌い方を意味する［Renou & Silburn 1954: 70; Howard 1983: 311］。Caland は PB のこの規定を，すべての詩節の各音節を o に換える歌い方をさすものと説明している［Caland 1931: 133, n. 1 on PB 7.1.8］。しかし，これが詩節全体の置き換えをさすのか，（仮に詩節全体の置き換えだとしても）すべての詩節に適応されるものなのかは不明である。PB に対応する JB にはこの規定そのものがないことや，後述する ṢaḍvB に見られるその後のカウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の Bahiṣpavamāna-stotra の歌い方から遡ると，この段階での PB のこの規定は，o などの単音による全詩節の完全な置き換えとは考えられず，詩節のある部分を不明瞭な形で歌うことが意図されていると推定できる。詳しくは，Fujii［2009–2010: 6f.］を見よ。

31） 馬車に繋がれた 2 頭の馬の肩（首のうしろ）に置かれた軛（くびき）の，肩に直接あたる部分ないし添え木（人文字形軛）のこと［cf. Rau 1983: 24］。Cf. ŚB 1.1.2.9. サーマ・ヴェーダの用語としての dhur については，Caland［1919: 105, n. 12］; Howard［1983: 322f.; 1986］; Fujii［1986: 16; 2009–2010: 9ff.］; Bodewitz［1990: 231, n. 19］。第 1 詠唱の変形詩節の総称として，一見，無関係に見える馬車に関する語が用いられていることについて，研究者のこれまでの説明は不十分である［Howard 1986: 94 : <'burden' added to the Udgātṛ>; Bodewitz 1990: 231, n. 19: <belonging to the fore-part; the fore-runners or first ones>］。ヴェーダでは祭式はしばしば馬車にたとえられるので，馬車を出立させるときに dhur の部分に力が入り軋（きし）むことと，朝の最初の詠唱で力を入れて詩節を変化させることの類似性から，この語が用いられたと考えるのが妥当である。祭式と馬車および馬車に馬をつなぐ（yuj）こととの関係については，cf. Fujii, forthcoming, Vedic *yóga-/yukti*.

32） Cf. JB 1.321［134,33］tasmād etā gāyatrīs satīś chandobhir ākhyāyante.「それ故，それら（dhur）は，gāyatrī 韻律の詩節でありながら，［いろいろな］韻律［の名］によって呼ばれる。」

33） これに対して，ジャイミニーヤ派においては JB での dhur の詳しい記述にもかかわらず，JŚS には dhur の規定がない。この学派では比較的早い時期に dhur が用いられなくなったと考えられる。JŚS の注釈者 Bhavatrāta は，Bahiṣpavamāna-stotra を規定する JŚS 1.11［Gaastra 1906: 13,13–15］への注釈の中で，第 1 詩節と他の詩節との違いは，前者が hum bhā を伴わないことだけであり，「この［スートラ］によって dhur は歌われないことが言われている（tena dhurām agāmam uktaṃ bhavati）」［Shastri 1966: 42,10］と述べる。Fujii［1986: 16］参照。

34） JB 1.103 [45,5f.] tad āhus. samadam iva vā etac chandobhyaḥ kurvanti yad gāyatre sati prātassavane sarvāṇi chandāṃsi gīyante. yodhukāḥ prajā bhavantīti. sa yaḥ kāmayeta śāntāḥ prajā edherann iti na dhuro vigāyed. apaśīrṣāṇaṃ tu yajñaṃ yajamānasya kuryād. . . . vy eva gāyed.「それについて［人々は］言っている，『朝のソーマ搾りはガーヤトリー韻律に属しているのに，そこにおいてすべての韻律［の名をもつ dhur］が歌われると，韻律たちのためにあたかも争いを生じさせる。民たちは好戦的になる』と。民たちが平和に栄えるように望むなら，dhur を歌い分けるべきではない。しかし［dhur を歌い分けないなら］祭主にとって祭式を頭のないものにすることになるだろう。…… まさに歌い分けるべきである。」

35） JUB 3.1.5.4–5 (3.5.4–5) [4] tato haiva stoman dadarśāntarikṣe vitatam bahu śobhamānam | tasyo ha yuktin dadarśa | [5] bahiṣpavamānam āsadya [ ] iti kuryāt | [ ] iti vācā | didṛkṣetaivākṣibhyām | śuśrūṣetaiva karṇābhyām | svayam idam mano yuktam |「[4] その直後，彼（ムンジャ・サーマシュラヴァサ）は，ストーマ（歌詠，詠唱形式）が中空に広げられて，おおいに輝いている

のを見た。彼はまた，それのユクティを見た。[5] バヒシュパヴァマーナ［・ストートラの場］へ座ったあと，［　］と行うべきである。声を伴って［　］と［行うべきである］。両目によって，まさに見ようとすべきである。両耳によって，まさに聞こうとすべきである。思考はここにおいて自ずから繋がれている。」［　］= ケーララ伝承のマラヤーラム文字写本では小さな丸印のみ。タミル伝承のグランタ文字写本では，Baroda 写本 : prāṇya iti kuryyāt | apānya iti vācā |　Mysore 写本 : mūccu viṭṭu prānya iti kuryāt | mūccu grahikka apānya iti vācā |　Sharma［1967: 236］によれば，mūccu viṭṭu と mūccu grahikka はタミル語で，それぞれ「息を吐く」「息を吸う」を意味する。JUB のこのような yukti は，JB において第 1 詠唱の dhur の別形に含まれていた感官のコントロールと精神集中が，ガーヤトラ･サーマンの歌い方が JUB において最終的に「身体（詩節）のないサーマン」となったことに応じて，第 1 詠唱の直前に移されたものである可能性がある。

36）　Cf. Parpola［1982: 219, n. 5］. Bahiṣpavamāna-stotra におけるこれらの行為は，精神集中としてのヨーガのヴェーダにおける貴重な先駆例である。これについては，ヴェーダにおける yóga/yukti を扱う別稿にゆずる。註 31 参照。

37）　JB 1.99 [43,26–28]　prajāpatir yat prajā asr̥jata tā dhūrbhir evāsr̥jata. reta eva retasyāsiñcat. prāṇaṃ gāyatryā samairayac. cakṣus triṣṭubhā. śrotraṃ jagatyā. vācam anuṣṭubhā. ātmānam eva paṅktyā pratyupādadhāt.「プラジャーパティが生き物たちを創出したとき，ほかならぬ dhur（pl.）によってそれらを創出した。retasyā によってほかならぬ精液を注いだ。gāyatrī によって気息を作り出した。triṣṭubh によって視覚を。jagatī によって聴覚を。anuṣṭubh によって言語機能を。paṅkti によって躯幹を加えた。」Cf. JB 1.100–102; 259–261; 318; ṢaḍvB 2.1–3.

38）　JB 1.318 [133,19]　yata etāṃ vigāyanti tata idaṃ garbhā muhyanti.「彼らがこの［最後の paṅkti］を歌い分けるとき，それによりこの時胎児たちは混乱に陥る。」Bodewitz は vigāyati の前に na を補っているが［1990: 35; 181; 310, n. 24］，必要はない。

39）　JB と ṢaḍvB の dhur の箇所にのみ現れる vi-gā : saṃ-gā は，祭式用語の vyūḍha : samūḍha，再生（生殖）用語の vi-kr̥（発生過程の分化）: saṃ-s-kr̥（個体としての統合）と同様に，vi : sam による対になった用語である［cf. Fujii 2009–2010: 17f.］。vyūḍha : samūḍha については，Murakawa [2000a] を参照。

40）　JB 1.320–321 [134,15–23]　tasmād o vā o vā ity eva gāyed. atho dve vāva dhurau manaś caiva vāk ca. . . . sa haiva devalokaṃ gamayati ya evaṃ vidvān udgāyaty. . . . atho hāsyaitābhyām eva dhūrbhyāṃ sarvā dhura upāptā bhavanti.「それ故，まさに o vā o vā と歌うべきである。そしてまた，実に 2 つの dhur がある。思考と言葉とである。…… このように知ってウドゥギータを歌うものは，［祭主を］神々の世界へ生かせる。…… さらにまた，これらの 2 つの dhur によって，すべての dhur が達成されたものとなる。」Cf. JUB 1.2.2 (1.9).

41）　Cf. Caland [1931: 131, n. 2 on PB 7.1.1]; Bodewitz [1990: 238, nn. 5 & 6]. 両人とも JUB に現れる āvr̥t が，新しいガーヤトラ･サーマンのために新たな定義されたものであることを見過ごしている。

42）　JŚS の注釈者 Bhavatrāta は JŚS の Kalpa 章への注釈の中で，次のように JUB を「身体（詩節）のないガーヤトラ［・サーマン］」（aśarīra gāyatra）の第一の典拠としてあげている : tasmād stotragatānāṃ gāyatrāṇām āmnāyābhāvāt upaniṣadi prapañcena vihitasyāśrīrasya gāyatrasya grahaṇaṃ yuktataraṃ bhavati「それ故，詠唱で用いられるガーヤトラ［・サーマン］たちは聖典には［記録されてい］ないので，ウパニシャッド（JUB）で詳細に規定されている身体のないガーヤトラ［・サーマン］を採ることは，よりふさわしい」[Shastri 1966: 145,29f.]

43）　Bahiṣpavamāna-stotra を中心とした一連の祭事の詳細については，Fujii [1986] を見よ。

44） Bahiṣpavamāna-stotra のあとに祭官たちが腕を持ち上げる所作をすることと，ウドゥガートリ祭官が祭主に祭場の北の境界をまたがせることは，ジャイミニーヤ派の文献にのみ規定されていて，他の学派には見られない［cf. Caland & Henry 1906–1907: 180f.］。この二つの行為は，1975 年ケーララ州で行われたアグニチャヤナ祭の記録映画［Gardner & Staal 1976］に録画され，あとの行為については，Staal［1983: I, 607］に写真が掲載されている。

45） Bahiṣpavamāna-stotra が歌われる場所（āstāva）について，JŚS は「チャートヴァーラの南」と述べる。他のシュラウタスートラにおいても，場所指定のしかたはさまざまであるが，総じて cātvāla のそばであることが強調されている。祭場（mahāvedi）の内か外かに関しては，「チャートヴァーラの南で［マハー・］ヴェーディの内」（HirŚS 8.4: 847,23; VaikhŚS 15.19: 201,7）。詳しくは，Fujii [1986: 6] を見よ。

46） Bodewitz は 動詞 pra-dah が火と結びつくことと，神々は天上にいることを理由に，“This one here（i.e. the fire）will burn everything here（in heaven）” と訳している［Bodewitz 1990: 50; 225］。

47） Cf. PB 6.7.24; ŚB 4.2.5.9. cātvāla と太陽との関係および cātvāla が天上界への通路と考えられていることについては，Fujii [1986: 12f.] を見よ。Cf. Krick [1982: 116]; Bodewitz [1986: 42, n. 26].

48） サーマ・ヴェーダ文献では「あちら向きの」（párāñc）という語は，繰り返しのない詩節やそのような詩節の上で歌われる歌詠に対して用いられる［Fujii 1986: 14; 2009–2010: 5, n. 10］。この語は向こうへの一方向で戻らないことを含意するので，しばしば来世や死と結びつけられている。

49） JB 1.84 [37,11] やその他の文献によれば，prastara の草束を持つのはアドヴァリユ祭官である［Fujii 1986: 6］。

50） JB 1.84 [37,22] によれば，（Bahiṣpavamāna-stotra の祭事の終了後）祭官たちの炉（dhiṣṇya）に火が移されると，神々の輪縄（devapāśāḥ）が祭場のまわりに張られるとされる［Fujii 1986: 23, n. 21］.

51） Bahiṣpavamāna-stotra, 特にそこで発せられるヒンカーラが食物との関連をもつことについては，例えば JB 1.101 参照。このことは，ChU 1.12 の，犬たちが食べ物を求めて Bahiṣpavamāna-stotra のところへ集まり，ヒンカーラを発する「犬のウドギータ」（śauva udgītha）の一節の背景になっている。ヒンカーラと食物の関係については，Thite [1997: 134] 参照。

52） 人が死んでいくとき，光線に覆われていた太陽が透けて見えるようになるとされている。Cf. AiĀ 3.2.4; ŚāṅkhĀ 8.7; BĀU 5.5.2; 5.15.1; ChU 8.6.5.

53） 希少語 akhala（= aghalá）については，Fujii [in press] 参照。

54） この箇所の udgṛhṇīyāt を，Oertel [1984: 85] は “he should take up [the cup]” と訳している。Bollée [1956: 43] と Bodewitz [1986: 37] は，Bahiṣpavamāna-stotra の第 1 詩節の歌い方に関する ṢaḍvB 2.1.2; LŚS 7.12.3 = DŚS 21.3.15 の規定 trir udgṛhṇāti「三度［音調を］上げる」（cf. Fujii 2009–2010: 10; 20; Caland & Henry 1906–1907: I, 178, n. 35; II, 467）に関係づけているが，無理がある。同じ詩節の同様の歌い方を JB 1.100 [43,33] が tryudāsāṃ gāyati「［その詩節を］三度の上昇をもつように歌う」という語で規定しているからである［Fujii 2009–2010: 10; cf. 8, n. 26］。JUB の当該文脈は cātvāla を通して祭主を天上界へ持ち上げることである。Cf. 上記（**3.2**）JB 1.89 bāhūn udgṛhṇanti. yajamānam eva tat svarge loke samādadhati.「彼らは腕を持ち上げる。それによってほかならぬ祭主を天上界に完全に置き定めることになる。」同様の ud-grah については，cf. TS 5.4.6.6; ŚB 3.1.4.1; 6.6.1.12.

55）「身体を振り払う」（śarīraṃ/śarīrāṇi dhū）という表現は以下の箇所に現れる： MS 3.9.6 [123,9];

KS 26.7 [130,10] = KapS 41.5; AB 4.24.3; JB 1.49; 1.252; JUB 1.4.1.5 (1.15.5); 3.6.2.2; 3 (3.30.2; 3); 3.7.1.10 (3.38.10); 3.7.2.1 (3.39.1); ChU 8.13.1.

56）火葬の火となるのは，祭主が死ぬまで保持した祭火である。祭主はその火で火葬されることによって，その火から天上の世界に生まれると考えられている。はじめて祭火を設置するときに祭主が祭火を生み出し，火葬に際して祭火が祭主を来世に生み出すという祭主と祭火との交互に生み生み出される関係は，ヴェーダの祭火をめぐる観念の中心である。Bodewitz [1973: 127ff.]; 井狩 [1988: 287ff.; 1989: 75f.] 参照。

57）JB 1.18 については，Bodewitz [1973: 54f.]; 井狩 [1988]; 後藤 [2009: 28f.]; 阪本（後藤）[2015: 56ff.] 参照。

58）この箇所の súvar（svàr の本来の 2 音節の語形）については，後藤 [2009: 37, n. 41] 参照。

59）疑問代名詞の ka が Prajāpati の別名であることについては，Wackernagel & Debrunner [1930–1957: III, 567]; Gonda [1986; 1989: 52] 参照。RV 10.121 で繰り返し ká（本文では kásmai）と問いかけられている神が，最後の詩節で Prajāpati であると明かされている（cf. ŚB 7.3.1.20; 7.4.1.19）。Ka が Prajāpati の名になった説話には，AB 3.21.1; TB 2.2.10 がある。

60）svargá- の語義については，Kasamatsu [2011] 参照。

61）JB 1.1–65 と JB 1.66 以降および他のヴェーダ文献との成立の前後関係について，Bodewitz [1973: 9–13] が詳しく論じている。

62）ここで取り上げた 2 箇所を含めて，JUB の再生説の主な箇所と内容をまとめると以下のとおりである。

（1）JUB 1.1.1–7 (1.1–7):「身体（詩節）のないサーマン」による天上界への上昇。o vā の三度の繰り返しによって三界をのぼり，天穹の孔である太陽を通って天上界に至る。天上界の入口で神格（太陽）との対話「お前は悪をなしたので通れない」「私がするのを見ていたお前こそが行為者だ」。

（2）JUB 1.9.1–3 (1.28–30): 太陽の 7 つの光線と諸方位, 個体の諸機能, 宇宙の諸存在との対応。サーマンによってそれらの光線にそって上昇し，太陽に至り，その中に開放される。

（3）JUB 1.15.1–3 (1.46–48): Prajāpati が自身を 16 の部分に分けて, 各部分に対応する存在の諸様態, 個体の諸機能，宇宙の諸存在を創造する。

（4）JUB 3.2.3–5 (3.8–10): 人間は三度生まれる。一度目父から，二度目母から，三度目祭式から。人間は三度死ぬ。一度目精子として放出されるとき，二度目潔斎するとき，三度目火葬の薪の上に置かれるとき。

（5）JUB 3.3.1–4 (3.11–14): 人間は三度死ぬ。一度目精子として放出されたとき，二度目潔斎するとき，三度目死ぬとき。「身体（歌詞）のないサーマン」の o vā の三度の繰り返しによって三界を獲得し，祭主に空間・謝礼・来世を与える。太陽の問「お前は誰（ka）か」，誤った答「私は某だ」，正しい答「私は Ka（であるお前）だ」（= JB 1.18）。

（6）JUB 3.5.1–9 (3.20–28): 天に昇った死者が，宇宙の諸存在（地，火，風，中空，方位，昼夜，半月，一ヶ月，季節，一年，ガンダルヴァ，アプサラス，天穹，神々）から，それらのところに置かれていた彼の身体の各機能の返還をうける。最後に地上に再生することへの言及がある。

（7）JUB 4.6.3–4.7.2 (4.8–10): サーマンによって祭主を身体をもつもの，四肢をもつものとして天上界に生まれさせ，死の束縛を取り除く。

このうち，（6）の死者が宇宙の諸存在から身体部位の返還を受け，身体を再構成する一節は，二

道説の先行形態として特に重要である。これについては 藤井 [1990]，より詳しくは Fujii [2011] を見よ。註 66 参照。

63） JUB と ChU の対応については，Oertel［1892; 1894: 註中の随所］が最初に指摘し，Belvalkar & Ranade [1927: 103ff.] が いくつかについて ChU の解説の中で記述している。JUB と ChU の対応箇所は以下のとおり：

JUB 1.2.3.3 (1.10.3) ~ ChU 2.23.4
JUB 1.3.1.5–1.3.2.5 (1.11.5–1.12.5) ~ ChU 2.9.1–8; 2.14
JUB 1.3.2.7 (1.12.7); 1.12.1 (1.35) ~ ChU 2.5.1; 2.16.1
JUB 1.3.2.9 (1.12.9)–1.3.3.1 (1.13.1); 1.12.2.1–2 (1.36.1–2) ~ ChU 2.3.1–2; 2.15.1
JUB 1.3.3.5 (1.13.5); 1.11.1.3 (1.33.3); 1.12.2.3–8 (1.36.3–8) ~ ChU 2.7.1
JUB 1.4.4 (1.18) ~ ChU 1.4
JUB 1.11.1.5 (1.33.5); 1.12.2.9 (1.36.9) ~ ChU 2.20.1
JUB 1.12.2.6 (1.36.6) ~ ChU 2.19.1
JUB 1.16.2–3 (1.51–52) ~ ChU 2.22.1
JUB 1.17.1.4–5 (1.53.4–5) ~ ChU 1.6–7
JUB 1.18.5 (1.60); 2.1.1–2 (2.1–2); 2.2.1–2.3.3 (2.3–9); 2.4.1–3 (2.10–12) ~ ChU 1.2
~ BĀUK 1.3 (ŚBM 14.4.1)
JUB 2.1.2.9–10 (2.2.9–10) ~ ChU 2.13.1–2
JUB 3.1.1–2 (3.1–2) ~ ChU 4.1–3
JUB 3.4.1–5 (3.15–19) ~ ChU 4.16–17
JUB 4.2.1 (4.2) ≈ ChU 3.16（ほぼ完全に一致）

64） JUB 3.1.1–2 (3.1–2) と ChU 4.1–3 の前後関係については，Lüders [1916]; Fujii [1989: 1002–999 (23–26)] 参照。ChU 4.1–3 が JUB 3.1.1–2 (3.1–2) を材料にした言葉遊びによるパロディーとなっていることは，後藤 [1994a]; Gotō [1996] によって詳細に分析されている。

65） Hauschild [1968] は，ChU 4.1–3 におけるプラークリット（中期インド・アーリヤ語）の影響を指摘している。また，Hoffmann [1976: 370] によれば，ChU 第 6 章 はヴェーダ後期の日常語の作品（ein Stück spätvedischer Umgangssprache）とみなされる。ChU の言語については，Morgenroth [1963]; Cohen [2008: 126–132] 参照。

66） 五火二道説の展開については，阪本（後藤）［2015: 27ff.］参照。JUB は五火説には関説しないが，二道説の形成に大きく関与している。後期ブラーフマナ文献から初期ウパニシャッドにかけて，再生説の一つとして，人間が死後さまざまな時間的および空間的な神的諸存在を巡るという思想が展開する。JB 1.17–18; 1.49–50; BĀUK 6.2.15–16 / ŚBM 14.9.18–19 ~ ChU 5.10 (5.10.1–2 ≈ 4.15.5–6) ~ Nirukta 13.21–22 (Pariśiṣṭa 2.89); KauṣU 1. 類似のものに，JUB 1.1.1–7 (1.1–7); 3.3.1–4 (3.11–14) [3.3.4.1–6 (3.14.1–6) = JB 1.18: 9,19–26]; 3.5.1–9 (3.20–28). ChU と BĀU はともに，この種の説の完成形と見なされる，いわゆる「二道説」を説く。それによれば，死者のたどる道が生前の行いによって，永遠の世界に至る「神々の道」（devayāna）と，再び地上に戻る「祖霊たちの道」（pitṛyāna）に分かれるという［ChU 5.10; BĀU 6.2.15–16］。より古い JB 1.17–18; 1.49–50 や，それをもとに作られた KauṣU 第 1 章の説では，死者がたどる道は一本である（一道説）。それらについては，Bodewitz [1973: 54f.]; 井狩 [1988]; 後藤 [2009: 28ff.]; Fujii [2011: 103, n. 2]; 阪本（後藤）[2015: 50–71] 参照。一方，JUB は一道説を説きながら，死者が死後時間的および空間的な神的諸存在を巡ることの本来の意味を伝える古い形を残している［JUB 3.5.1–9 (3.20–28)］。そこでは，死後さまざまな

神的諸存在を巡るのは，そこに預けられていた各身体部位を回収して，完全な身体を再構築するためであることが語られている［Fujii 2011］。

67）ウパニシャッドの秘義を最初に教えるのが，JUB では最高存在である中性のブラフマンであるのに対して，ChU ではブラフマン神（男性）となっている。JUB 3.7.3.1 (3.40.1) tad etad brahma prajāpataye [']bravīt | prajāpatiḥ parameṣṭhine prājāpatyāya | . . .「そのようなこのことをブラフマン（中性）はプラジャーパティに語った。プラジャーパティはパラメーシュティン・プラージャーパティヤに［語った］。……」ChU 3.11.4 = 8.15.1 tad etad brahmā prajāpataya uvāca | prajāpatir manave | manuḥ prajābhyaḥ | . . .「そのようなこのことをブラフマン神（男性）はプラジャーパティに語った。プラジャーパティはマヌに［語った］。マヌは生き物たちに［語った］。……」ヴェーダにおいて男性名詞のブラフマンが神格名として現れるのは稀で，以下の後期ないし末期の文献の数箇所に見られるだけである：MS 2.9.1; VS 18.76 = ŚB 10.1.3.8; GB 1.1.16; Sāmavidhāna-Brāhmaṇa 1.1–3; ŚāṅkhĀ 15; ChU 3.11.4; 8.15.1; KauṣU 1.5f.; MuṇḍU 1.1.1; ŚvetU 5.5; 6; MaitrU 4.5; 5.1; 6.5 [cf. Bailey 1983: 3f.]. MS 2.9.1 は Sāvitrī 詩節の変形集に入っていて，MS 本体よりもはるかに遅く成立したものである。註 12 参照。

68）カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の「身体（詩節）のない」ガーヤトラ・サーマンについては，Caland & Henry [1906–1907: I, 180] 参照。ジャイミニーヤ派のものと異なり，詩節のもとの音節をすべて 単音 o に置き換えて歌われる。

69）同じように ChU が JUB に依拠しながらも，自派の祭式伝統に合致しない部分を削除したものに，JUB 3.4.1–5 (3.15–19) に対応する ChU 4.16–17 がある。ともにブラフマン祭官の職務を述べる箇所で，ブラーフマナ文献に多くのパラレルをもっている： AB 5.32–34; KauṣB (Lindner) 6.10–12 = (Sarma) 6.4–7; JB 1.357–358; ṢaḍvB 1.5.1–9; ŚB 11.5.8; GB 1.2.24–1.3.5. これらの中で，ChU は JUB にきわめて近く，JUB の各部分をそのままコンパクトにしたテキストを示しているが，JUB の最後にある，祭式行為に対するブラフマン祭官の最終指令（prasava または anumantraṇa）に関する部分を欠いている。ブラフマン祭官の指令については，唱えられる祭文の中に stomabhāga と呼ばれる定型句を挿入するかしないかで学派間で違いがある。ChU が属する カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派サーマ・ヴェーダ，黒ヤジュル・ヴェーダ，アタルヴァ・ヴェーダが stomabhāga を用いるのに対して，ジャイミニーヤ派サーマ・ヴェーダ，リグ・ヴェーダ，白ヤジュル・ヴェーダはそれを用いない。しかも，JUB では stomabhāga は強く否定され，ブラスマン祭官は指令として om のみを唱えることが推奨されている。ChU は自派の祭式伝統との不一致を避けるために，JUB のその部分を除いたと思われる。詳しくは［Fujii 1991］参照。

70）以下のヴラタと学習対象については，Parpola が Oldenberg [1892: 69ff.; 1908: 718ff.; 1915 (1916): 392ff.] の研究を発展させて，カウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派とジャイミニーヤ派のサーマ・ヴェーダ・サンヒターの構成の観点から検討している [Parpola 1968–1969: I:1, 69–74]。

71）JGS 1.16: 15,8–9 vrātike vrataparvādityavrātike śukriyāṇy aupaniṣada upaniṣadaṃ śrāvayet ‖

72）ジャイミニーヤ派の歌曲集（Gāna）は未出版であるが，ĀrG の部分はタミル・ナードゥ州の同派の学匠によって出版されている。それによると，aupaniṣada parvan の最後のサーマンは prājāpatyaṃ gāyatram と呼ばれ，以下の形をしている：tat savitur vareṇyoṃ bhargo devasya dhīmāhā | ī dhīyo yo naḥ | prācā hiṃ bhā o vā o vā | him bhā o vā ‖（音符を省略）［Makara Bhushanam n.d.: 100］。筆者が収集したケーララ州のナンブーディリ・ジャイミニーヤ派（後述）の ĀrG の紙写本では，以下のようになっている：tat savitur vvareṇyoṃ | bharggo devasya dhīmāhāyi dhiyo yo naḥ prācā haṃ bhā o vā | o vā o vā o vā haṃ bhā o vā |

73） Nārāyaṇa Bhaṭṭa on GobhGS 3.1.28 vrātikam āraṇyakasya śukriyavarjasya | ādityavrataṃ śukriyāṇām, aupaniṣadam upaniṣadbrāhmaṇasya | jyeṣṭhasāmavratam ājyadohānām adhyayanārtham iti |（jyeṣṭhasāmavrata はスートラ本文では jyaiṣṭhasāmika）「ヴラーティカ［・ヴラタ］はシュクリヤ以外のアーラニヤカの，アーディティヤ・ヴラタはシュクリヤたちの，アウパニシャダ［・ヴラタ］はウパニシャッド・ブラーフマナの，ジュエーシュタサーマ・ヴラタはアージュヤドーハたちの学習を目的としている。」

74） JUB の文献としての分類が不安定なことによる研究上の損失として，全ヴェーダ文献の単語索引 *A Vedic Word-Concordance* に JUB が含まれていないことがある。JUB は第 1 版ではブラーフマナの巻に含まれていたが，現在流布している改訂第 2 版からは，“more akin to the Upaniṣad Volume” という理由で除外されている［Vishva Bandhu 1973: x］。ウパニシャッドの巻の第 2 版［Vishva Bandhu 1977］は改訂版ではないため，結果的に JUB はどちらにも含まれないことになっている。ただし，類書の *A Grammatical Word-Index to the Principal Upaniṣads* [Vishva Bandhu 1966] では，JUB はウパニシャッドに含まれている。

75） サーマ・ヴェーダでは「アーラニヤカ（Āraṇyaka）」「アーラニヤ（Āraṇya）」または「アーラナ（Āraṇa）」と呼ばれるものは，神秘的な詩節とサーマンを収録したものである。Oldenberg [1915 (1916): 382–401 (9. Āraṇyaka)] はアーラニヤカ文献について，サーマ・ヴェーダおよび上述のヴェーダ学習のヴラタの事例を含めて考察している。註 70 参照。

76） 最近では JUB は ウパニシャッドの中に分類されることが多い［Jamison & Witzel 1992: 13; 後藤 1994b: 65 など］。註 74 参照。

77） ジャイミニーヤ派サーマ・ヴェーダの文献と伝承については Parpola [1973]; Fujii [2012]; Fujii & Parpola [2016]，JUB の成立と伝承については Fujii [1997]，現代のケーララ州のヴェーダ伝承と祭式については藤井［2012］参照。

78） JB の Baroda 写本［No. 9851］には，Sattra 祭の章（JB 2.334–370）の後に以下の奥付が記されている：mahābrāhmaṇam /360/ dvādaśāham /388/ mahāvratam /151/ ekāham /153/ ahīnam /100/ satram /39/ āhatya khaṇḍam /1190// ārṣeyam /84/ upaniṣat /154/ āhatya khaṇḍam /1428/ [Shrigondekar et al. 1925: 130]. Cf. Parpola [1968–1969: I:1, 48]; Murakawa [2000b: 111].

79） Mahāvrata は 1 年にわたる Gavāmayana 祭の最終日前日に行われる祭式の名であるが，ここでは Gavāmayana 全体をさしている。JB の刊本［Raghu Vira & Lokesh Chandra 1954］では，用いられた写本の乱れにより，Mahāvrata，Ekāha，Ahīna，Sattra の部分が Dvādaśāha 祭の部分と逆になって第 2 巻となり，さらに Mahāvrata の部分が二つに分割されて第 2 巻の始めと終わりに離れて置かれている。JB の本来のテキストの順序はこの奥付のとおりである。筆者がケーララ州のナンブーディリ・ジャイミニーヤ派学匠の家で入手した JB の新写本（第 1 巻欠）は，本来のテキストの順序を保っている。Cf. Murakawa [2000b: 111; 124ff.]; Ehlers [2000: 8f.].

80） Oertel がはじめてこの文献に付けたタイトル “Jāiminīya or Talavakāra Upaniṣad Brāhmaṇa” は，彼が用いた Burnell の写本（IOL Sans MS 4357）に記された表題 “talavakālabrāhmaṇe upaniṣatbrāhmaṇaṃ”「タラヴァカーラ・ブラーフマナの中のウパニシャッド・ブラーフマナ」によっている。同じく ChU も，前述の GobhGS の注釈に見られるように，カウトゥマ派内では upaniṣad-brāhmaṇa と呼ばれている。註 84 参照。

81） ケーララ州のジャイミニーヤ派の JUB の写本はすべて次の奥付で終わっている：jaiminīyopaniṣadaṃ samāptaṃ「ジャイミニーヤ・ウパニシャッド終了」

82） 筆者がナンブーディリ・ジャイミニーヤ派の家々を訪れて，7 つの家から 9 つの JUB 写本を収

集した。また，ケーララ州の複数の大学文書館には，ナンブーディリ・ジャイミニーヤ派の家から寄贈された JUB 写本が 8 つ保管されている。

83）14 のウパニシャッドは以下のとおり：Bṛhadāraṇyaka, Chāndogya, Taittirīya, Aitareya, Kauṣītaki, Kena, Kaṭha, Īśā, Śvetāśvatara, Muṇḍaka, Mahānārāyaṇa, Praśna, Maitrāyaṇa, Māṇḍūkiya. Belvalkar & Ranade [1927: 87] は Mahānārāyaṇa を除外。Olivelle [1998] は，Maitrāyaṇa と Mahānārāyaṇa を除いて校訂・翻訳している。

84）カウトゥマ派では次の 8 種のブラーフマナを伝承している：1）PB, 2）ṢaḍvB, 3）Sāmavidhāna-Brāhmaṇa, 4）Ārṣeya-Brāhmaṇa, 5）Devatādhyāya-Brāhmaṇa, 6）Upaniṣad-Brāhmaṇa, 7）Saṃhitopaniṣad-Brāhmaṇa, 8）Vaṃśa-Brāhmaṇa（Upaniṣad-Brāhmaṇa が最後にくる伝承もある）。このうち Upaniṣad-Brāhmaṇa は，Mantra-Brāhmaṇa（はじめの 2 prapāṭhaka）と ChU（残りの 8 prapāṭhaka）からなっている。Caland [1931: ii–iv] 参照。上述のタミル・ジャイミニーヤ派の場合と同じく，カウトゥマ派の伝承においても，これらの Brāhmaṇa はテキストの区分名であり，必ずしも「ブラーフマナ文献」を意味していない。

85）Renou [1947: 106] は，JUB を JB の補遺文献として，PB の補遺文献である ṢaḍvB と対応させているが，第 1 詠唱 Bahiṣpavamāna-stotra の歌い方の変化について上記 **2.1** で考察したように，JB 新層と ṢaḍvB が対応している。Cf. Bodewitz [1986: 32].

86）例えば，ヤジュル・ヴェーダのカタ派では，ヴェーダ学習課程のヴラタの内，śukriya-vrata はアーラニヤカ，aupaniṣada-vrata はウパニシャッドの学習に対するものである [Witzel 1977: 140f.; 152f.]。

87）内容に関してアーラニヤカとウパニシャッドの区別が明瞭でないことについては，Olivelle [1998: 8] 参照。Belvalkar & Ranade [1927] はウパニシャッドを概説するにあたって，ウパニシャッドと名づけられた文献以外に，それらと同等の内容と文体をもつブラーフマナやアーラニヤカの箇所をも取り上げるべきであると述べ [87f.]，それらについても解説している（ŚB 3 箇所，JB 2 箇所，JUB 3 箇所）[133f.; 146–154]。

**略号表**

AB = Aitareya-Brāhmaṇa
AiĀ = Aitareya-Āraṇyaka
ĀrG = Āraṇya-Gāna or Āraṇa-Gāna
BĀU = Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad
BĀUK = Bṛhadāraṇyaka-Upaniṣad (Kāṇva recension)
ChU = Chāndogya-Upaniṣad
DŚS = Drāhyāyaṇa-Śrautasūtra
GB = Gopatha-Brāhmaṇa
GobhGS = Gobhila-Gṛhyasūtra
HirŚS = Hiraṇyakeśi-Śrautasūtra
JĀrG = Jaiminīya-Āraṇyagāna
JB = Jaiminīya-Brāhmaṇa
JGS = Jaiminīya- Gṛhyasūtra
JS = Jaiminīya-Saṁhitā or
KenaU = Kena-Upaniṣad
KhādGS = Khādira- Gṛhyasūtra
KS = Kāṭhaka-Saṁhitā
LŚS = Lāṭyāyana-Śrautasūtra
MaitrU = Maitrāyaṇīya-Upaniṣad
MS = Maitrāyaṇī Saṁhitā
MuṇḍdU = Muṇḍaka-Upaniṣad
PB = Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa
RV = Ṛgveda-Saṁhitā
ṢaḍvB = Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa
ŚāṅkhĀ = Śāṅkhāyana-Āraṇyaka
ŚB = Śatapatha-Brāhmaṇa
ŚBM = Śatapatha-Brāhmaṇa (Mādhyandina recention)
SV = Sāmaveda

Sāmaveda (Jaiminīya recension)
JŚS = Jaiminīya-Śrautasūtra
JUB = Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa
KapS = Kapiṣṭhalakaṭha-Saṁhitā
KauṣB = Kauṣītaki-Brāhmaṇa
KauṣU = Kauṣītaki-Upaniṣad
ŚvetU = Śvetāśvatara-Upaniṣad
TB = Taittirīya-Brāhmaṇa
TS = Taittirīya-Saṁhitā
VaikhŚS = Vaikhānasa-Śrautasūtra
VS = Vājasaneyi-Saṁhitā

**参考文献**


井狩彌介　1988.「輪廻と業」『岩波講座 東洋思想』第 6 巻 . 岩波書店 : 276–306.

――― 1989.「ヴエーダ祭式文献にみられる再生観念の諸相」『人文学報』63: 69–78.

後藤敏文　1994a.「Chandogya-Upaniṣad IV 1–3『Pautrāyaṇa と Raikva』」『印度学仏教学研究』42.2: 1041–1035 (42–48).

――― 1994b.「第一章 神々の原風景――ヴェーダ」「第二章 宇宙を操る祭式―ブラーフマナ」「第三章 隠された原理―ウパニシャッド」上村勝彦・宮元啓一［編］『インドの夢・インドの愛――サンスクリット・アンソロジー』春秋社 : 3–86.

――― 2009.「『業』と『輪廻』――ヴェーダから仏教へ」『印度哲学仏教学』24: 16–41.

阪本（後藤）純子　2015.『生命エネルギー循環の思想――「輪廻と業」理論の起源と形成』（RINDAS 伝統思想シリーズ 24）龍谷大学現代インド研究センター .

辻 直四郎　1967.『インド文明の曙――ヴェーダとウパニシャッド』（岩波新書）岩波書店 .

――― 1977.『ヴェーダ学論集』岩波書店 .

――― 1978.『古代インドの説話――ブラーフマナ文献より』春秋社 .

――― 1981 (1948).「現存 Sāmaveda 文献の概観（Saṃhitā 篇）」『辻直四郎著作集　第一巻 ヴェーダ学 Ⅰ』法藏館：317–344. 原著：慶応義塾大学語学研究所『語学論叢』1 (1948): 1–37.

中村　元　1981 (1950).『初期ヴェーダーンタ哲学史　第一巻　初期のヴェーダーンタ哲学』岩波書店 . 第 3 刷（第 1 刷発行 1950）.

藤井 正人　1989.「最初期ウパニシャッド文献の成立と伝承――Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 研究序説」『待兼山論叢（哲学篇）』23: 13–25.

――― 1990.「二道説の成立――後期ヴェーダの再生説」『日本仏教学会年報』55: 43–56.

――― 1995.「古代宗教歌詠の思想性――哲学生成の一断面」『人文学のアナトミー』岩波書店 : 99–114.

――― 1996.「Kena-Upaniṣad (=Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 4,10 [4,18–21])」『今西順吉教授還暦記念論集 インド思想と仏教文化』春秋社 : 842–821 (107–128).

――― 2012.「ヴェーダの復興――南インド・ケーララ州における古代と現代の接触」田中雅一・小池郁子［編］『コンタクト・ゾーンの人文学　第Ⅲ巻―Religious Practices ／宗教実践』晃洋書房 : 270–302.

――― 印刷中「王座とブラフマン祭官――『カウシータキ・ウパニシャッド』第一章をめぐって」藤井正人・手嶋英貴［編］『ブラフマニズムとヒンドゥイズム 1　古代・中世インドの社会と思想』法藏館 .

Bailey, Greg　1983. *The Mythology of Brahmā*. Delhi: Oxford University Press.

Belvalkar, S. K. and R. D. Ranade　1927. *History of Indian Philosophy*. Vol. 2: The Creative Period. Poona: Bilvakuñja Publishing House.

Bodewitz, H. W. 1973. *Jaiminīya Brāhmaṇa I, 1–65. Translation and Commentary with a Study: Agnihotra and Prāṇāgnihotra.* (Orientalia Rheno-Traiectina, 17). Leiden: E. J. Brill.

——— 1986. Reaching Immortality According to the First Anuvāka of the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa. *Dr. B. R. Sharma Felicitation Volume*: 32–42 (English Section). Tirupati: Kendriya Sanskrit Vidyapeetha.

——— 1990. *The Jyotiṣṭoma Ritual. Jaiminīya Brāhmaṇa I, 66–364.* (Orientalia Rheno-Traiectina, 34). Leiden: E. J. Brill.

Bollée, W. B. 1956. *Ṣaḍviṃśa-Brāhmaṇa: Introduction, Translation, Extracts from the Commentary and Notes.* Proefschrift (Utrecht). Utrecht.

van Buitenen, J. A. B. 1959. Akṣara. *Journal of the American Oriental Society* 79.3: 176–187.

Burnell, A. C. 1878. *The Jaiminīya Text of the Ārsheyabrāhmaṇa of the Sāma Veda.* Mangalore: Basel Mission Press.

Brereton, Joel P. 2004. *Bráhman, Brahmán*, and Sacrificer. In: Arlo Griffiths and Jan E. M. Houben (eds.), *The Vedas: Texts, Language & Ritual. Proceedings of the Third International Vedic Workshop, Leiden 2002* (Groningen Oriental Studies, Vol. 20): 325–344. Groningen: Egbert Forsten.

Caland, W. 1907. *Die Jaiminīya-Saṃhitā mit einer Einleitung über die Sāmavedaliteratur.* (Indische Forschungen, 2. Heft). Breslau: Verlag von M. & H. Marcus.

——— 1919. *Das Jaiminīya-Brāhmaṇa in Auswahl: Text, Übersetzung, Indices.* (Verhandelingen der Koninklijke Akademie van Wetenschappen te Amsterdam, Afdeeling Letterkunde, Deel I, Nieuwe Reeks, Deel XIX, No. 4). Amsterdam.

——— 1931. *Pañcaviṃśa-Brāhmaṇa: The Brāhmaṇa of Twenty Five Chapters.* (Bibliotheca Indica, 255). Calcutta: Asiatic Society.

Caland, W. et V. Henry 1906–1907. *L'Agniṣṭoma: Description complète de la forme normale du sacrifice de Soma dans le culte védique.* 2 vols. Paris: Ernest Leroux.

Cohen, Signe 2008. *Text and Authority in the Older Upaniṣads.* (Brill's Indological Library, 30). Leiden: Brill.

Deshpande, Indu C. 1980. Concept of the Gāyatra-sāman in the Jaiminīya Āraṇyaka. *CASS Studies, Number 5* (Publications of the Centre of Advanced Study in Sanskrit, Class E, No. 7): 49–60. Pune: University of Poona.

Deussen, Paul 1919. *Allgemeine Geschichte der Philosophie.* 1. Band, 2. Abteilung: Die Philosophie der Upanishads. 3.Auflage. Leipzig: F. A. Brockhaus.

Ehlers, Gerhard 2000. Auf dem Weg zu einer neuen Edition des Jaiminīya-Brāhmaṇa. *Berliner Indologische Studien* 13/14: 1–28.

Fujii, Masato 1984. On the unexpressed *gāyatra-sāman* in the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 32.2: 1123–1121 (1–3).

——— 1986. The *Bahiṣpavamāna* Ritual of the Jaiminīyas. *Machikaneyama Ronso* (Philosophy) 20: 3–25.

——— 1987. The *Gāyatra* and Ascension to Heaven (Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 1,1–7; 3,11–14). *Journal of Indian and Buddhist Studies* 35.2: 1005–1002 (16–19).

——— 1989. Three Notes on the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 3,1–5. *Journal of Indian and*

*Buddhist Studies* 35.2: 1002–994 (23–31).

——— 1991. The Brahman Priest (Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa 3,15–19). *Journal of Indian and Buddhist Studies* 39.2: 1054–1050 (1–5).

——— 1997. On the Formation and Transmission of the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa. In: M. Witzel (ed.), *Inside the Texts, Beyond the Texts: New Approaches to the Study of the Vedas* (Harvard Oriental Series, Opera Minora, 2): 89–102. Cambridge, MA: Dept. of Sanskrit and Indian Studies, Harvard University.

——— 1999. A Common Passage on the Supreme Prāṇa in the Three Earliest Upaniṣads (JUB 1,60–2,12; BĀU 1,3; ChU 1,2). *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanites, Kyoto University* 34 (2): 51–86.

——— 2001. The Brahman Priest in the History of Vedic Texts. In: K. Karttunen & P. Koskikallio, *Vidyārṇavavandanam: Essays in Honour of Asko Parpola* (Studia Orientalia, 94): 147–160. Helsinki: Finnish Oriental Society.

——— 2009–2010. The *Gāyatra-Sāman:* Chanting Innovations in the Sāmavedic Brāhmaṇas and Upaniṣad. *Zinbun: Annals of the Institute for Research in Humanites, Kyoto University* 42: 1–37.

——— 2011. The Recovery of the Body after Death: A prehistory of the *devayāna* and *pitṛyāna*. In: B. Tikkanen & A. M. Butters (eds.), *Pūrvāparaprajñābhinandanam—East and West, Past and Present: Indological and Other Essays in Honour of Klaus Karttunen* (Studia Orientalia, 110): 103–120. Helsinki: Finnish Oriental Society.

——— 2012. The Jaiminīya Sāmaveda Traditions and Manuscripts in South India. In: Saraju Rath (ed.), *Aspects of Manuscripts Culture in South India:* 99–118. Leiden: E. J. Brill.

——— in press. Vedic *aghalá-/akhala-*. *Proceedings of the 7th International Vedic Workshop, August 19–24, 2019, Dubrovnik, Croatia.*

Fujii, Masato & Asko Parpola 2016. Manuscripts of the Jaiminīya Sāmaveda Traced and Photographed in 2002–2006. In: A. Parpola and P. Koskikallio (eds.), *Vedic Investigations* (Papers of the 12th World Sanskrit Conference, Vol. 1): 127–162. Delhi: Motilal Banarsidass.

Gaastra, Dieuke 1906. *Bijdrage tot de kennis van het vedische ritueel. Jaiminīyaśrautasūtra.* Diss. Utrecht. Leiden: Brill.

Gotō, Toshifumi 1996. Zur Geschichte vom König Jānaśruti Pautrāyaṇa (Chāndogya-Upaniṣad IV 1–3). *Studien zur Indologie und Iranistik* 20 (Festschrift Paul Thieme): 89–115.

Gonda, J. 1975. *Vedic Literature (Saṃhitās and Brāhmaṇas).* (A History of Indian Literature, Vol. I, Fasc. 1). Wiesbaden: Otto Harrassowitz.

——— 1986. The Pronoun *ka* and the Proper Nama *Ka*. *The Adyar Library Bulletin* 50 (Golden Jubilee Volume): 85–105 = Gonda, J. *Selected Studies*: VI 2, 449–469. Leiden: E. J. Brill, 1991.

——— 1989. *Prajāpati's relations with Brahman, Bṛhaspati and Brahmā*. (Verhandelingen der Koninklijke Nederlandse Akademie van Wetenschappen, Afd. Letterkunde, Nieuwe Reeks, deel 138). Amsterdam: North-Holland Publishing Company.

Hauschild, Richard 1968. Die Saṃvarga-vidyā (Chānd. Up. 4, 1–3). Ergänzende sachliche und grammatische Bemerkungen. In: *Mélanges d'indianisme à la mémoire de Louis Renou*: 337–365. Paris: E. de Boccard

Hoffmann, Karl 1976. *Aufsätze zur Indoiranistik*. 2. Bd. Wiesbaden: Dr. Ludwig Reichert Verlag.

Howard, Wayne 1977. *Sāmavedic Chant*. New Haven: Yale University Press.

——— 1983. The Music of Nambudiri Unexpressed Chant (aniruktagāna). In: F. Staal (ed.), *Agni: The Vedic Ritual of the Fire Altar*. II, 311–342. Berkeley: Asian Humanities Press.

——— 1986. The *Dhurs* of the *Gāyatra-Sāman*. *Dr. B. R. Sharma Felicitation Volume*: 87–96 (English Section). Tirupati: Kendriya Sanskrit Vidyapeetha.

——— 1987. The Body of the Bodiless Gāyatra. *Indo-Iranian Journal* 30: 161–173.

Jamison, S. W. and M.Witzel 1992. *Vedic Hinduism*. [PDF]
http://www.people.fas.harvard.edu/~witzel/vedica.pdf

Kajihara, Mieko 2018–2019. The Sacred Verse Sāvitrī in the Vedic Religion and Beyond. *Journal of Indological Studies* 31 & 32: 1–36.

Kasamatsu, Sunao 2011. Vedic *svargá-*. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 59.3: 1091–1096 (17–22).

Kashikar, C. G. 1970. *Śrautakośa*. Sanskrit Section. Vol. II, Part I. Poona: Vaidhika Saṁśodhana Maṇḍala.

Klaus, K. 1986. *Die altindische Kosmologie. Nach den Brāhmaṇas dargestellt*. (Indica et Tibetica, 9). Bonn: Indica et Tibetica Verlag.

Krick, Hertha 1982. *Das Ritual der Feuergründung (Agnyādheya)*. (Veröffentlichungen der Kommission für Sprachen und Kulturen Südasiens, Heft 16). Wien: Österreichische Akademie der Wissenschaften.

Limaye, V. P. and R. D. Vadekar (eds.). 1958. *Eighteen Principal Upaniṣads*. Vol. I. Gandhi Memorial Edition. Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala.

Lüders, Heinrich 1916. Zu den Upaniṣads. I. Die Saṃvargavidyā. *BSB:* 278–309 = H. Lüders, *Philologica Indica:* 361–390. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1940.

Makara Bhushanam, T. N. n.d. [2000]. *Ārana Ganam of Talavakara Sakha of Jaiminiya Saman*. Chennai: Veda Rakshana Nidhi Trust.

Morgenroth, W. 1963. Die Sprache der Chāndogya-Upaniṣad. In: *History and Culture of Ancient India*: 223–234. Moscow: USSR Academy of Sciences.

Murakawa, Akiko 2000a. The vyūḍha/avyūḍha/samūḍha Daśarātra. *Journal of Indian and Buddhist Studies* 48.2: 1152–1150 (1–3).

——— 2000b. The Gavāmayana Portion(s) of the Jaiminīya-Brāhmaṇa: A Preliminary Study. *Journal of the Japanese Association for South Asian Studies* 12: 110–134.

Oertel, H. 1892. Extracts from the Jāiminīya-Brāhmaṇa and Upanishad-Brāhmaṇa, parallel to passages of the Śatapatha-Brāhmaṇa and Chāndogya-Upanishad. *Journal of the American Oriental Society* 15: 233–251.

——— 1894. The Jāiminīya or Talavakāra Upaniṣad Brāhmaṇṇa: Text, Translation, and Notes. *Journal of the American Oriental Society* 16: 79–260.

——— 1921. *The Jaiminiya or Talavakara Upanishad Brahmana: Devanagari text with indexes, prepared from the edition in Roman script of Shri Hanns Oertel by Rama Deva, with an introduction on the history of Samaveda literature by Bhagavad Datta*. (Dayānanda Mahāvidyālaya Saṃskr̥ta-granthamālā, 3). Lahore.

Oldenberg, Hermann 1892. *The Grihya-Sūtras: Rules of Vedic Domestic Ceremonies*. Part 2. (The

Sacred Books of the East, 30). Oxford: Clarendon Press.

——— 1908. Rev. of *Die Jaiminīya-Saṃhitā mit einer Einleitung über die Sāmaveda-literatur*, by W. Caland. *Göttingische gelehrte Anzeigen*, 170. Jahrgang: 711–737.

——— 1915 (1916). Zur Religion und Mythologie des Veda. *Nachrichten von der Kön. Gesellschaft der Wissenschaften zu Göttingen, Phil.-hist. Klasse*, 1915 (1916): 167–403 = H. Oldenberg, *Kleine Schriften*: I, 339–440. Wiesbaden: Franz Steiner Verlag GMBH, 1967.

Olivelle, Patrick 1998. *The Early Upaniṣads: Annotated Text and Translation*. New York: Oxford University Press.

Parpola, Asko 1968–1969. The *Śrautasūtras of Lāṭyāyana and Drāhyāyaṇa and their commentaries: An English translation and study*. Vol. I: 1 & 2. (Commentationes Humanarum Litterarum, Societas Scientiarum Fennica, 42.2 & 43.2). Helsinki.

——— 1973. *The Literature and Study of the Jaiminīya Sāmaveda in Retrospect and Prospect*. (Studia Orientalia, 43: 6). Helsinki: Finnish Oriental Society.

——— 1982. On the Abnormal Khaṇḍa Divisions of the Jaiminīya-Brāhmaṇ and the Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa. In: T. N. Dharmadhikari (ed.), *Goden Jubilee Volume*: 215–224. Poona: Vaidika Saṁśodhana Maṇḍala.

——— 1986. Jaiminīya Texts and the First Feeding of Solid Food. In: A. Parpola & B. S. Hansen (eds.), *South Asian Religion and Society* (Studies on Asian Topics, No. 11): 68–96. Copenhagen: Scandinavian Institute of Asian Studies.

Raghu Vira and Lokesh Chandra (eds.) 1954. *Jaiminiya-Brahmana of the Sāmaveda*. (Sarasvati-Vihara Series, 31). Nagpur: International Academy of Indian Culture.

Rau, Wilhelm 1983. *Zur vedischen Altertumskunde*. (Abhandlungen der geistes- und sozialwissenschaftlichen Klasse, Jahrgang 1983, Nr. 1). Mainz: Akademie der Wissenschaften und der Literatur; Wiesbaden: Franz Steiner.

Renou, Louis 1947. *Les écoles védiques et la formation du Veda*. Paris: Imprimerie nationale.

Renou, Louis 1953. Le passage des Brāhmaṇa aux Upaniṣad. *Journal of the American Oriental Society* 73: 138–144.

Renou, Louis and Liliane Silburn 1954. Nírukta and Ánirukta in Vedic. In: *Sarūpa-Bhāratī: The Homage of Indology: Dr. Lakshman Sarup Memorial Volume* (Vishveshvaranand Indological Series, 6): 68–79. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.

Sharma, B. R. (ed.) 1967. *Jaiminīyārṣeya-Jaiminīyopaniṣad-Brāhmaṇas*. (Kendriya Sanskrit Vidyapeetha Series, Nos. 5-6). Tirupati: Kendriya Sanskrit Vidyapeetha.

Shastri, Premnidhi 1966. *Jaiminīya-Śrauta-Sūtra-Vṛtti of Bhavatrāta*. (Śata-Piṭaka Series, 40). New Delhi: International Academy of Indian Culture.

Shrigondekar, G. K. and K. S. Ramaswami Shastri Siromani 1925. *A Descriptive Catalogue of Manuscripts in the Central Library, Baroda*. Vol. 1: Vedic. (Gaekwad's Oriental Series, 27). Baroda.

Staal, Frits 1968. The Twelve Ritual Chants of the Nambudiri Agniṣṭoma. In: J. C. Heesterman et al. (eds.), *Pratidānam: Indian, Iranian and Indo-European Studies presented to F. B. J. Kuiper on his sixtieth birthday*: 409–429. The Hague: Mouton.

——— 1983. *Agni: The Vedic Ritual of the Fire Altar*. 2 vols. Berkeley: Asian Humanities Press.

Thieme, Paul 1952. Bráhman. *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft* 102: 91–129.

Thite, G. U. 1997. *Music in the Vedas: Its Magico-Religious Significance*. Delhi: Sharada Publishing House.

Vishva Bandhu 1966. *A Grammatical Word-Index to the Principal Upaniṣads*. Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.

——— 1973, 1977. *A Vedic Word-Concordance*. II: Brāhmaṇas (2nd edition 1973). III: Upaniṣads (2nd edition 1977). Hoshiarpur: Vishveshvaranand Vedic Research Institute.

Wackernagel, J. & A. Debrunner 1930–1957. *Altindische Grammatik*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.

Witzel, Michael 1977. An Unknown Upaniṣad of the Kṛṣṇa Yajurveda: The Kaṭha-Śikṣā-Upaniṣad. *Journal of the Nepal Research Centre* 1 (Humanities): 139–153.

**記録映画**

Gardner, Robert and Frits Staal (prod.) 1976. *Altar of Fire (Agnicayana 1975)*. The Film Study.

## 要　旨

ウパニシャッドは，古代インドの宗教儀礼文献であるヴェーダの中に現れた一群の哲学書である。その最古のものと考えられるのが，本稿で取り上げる『ジャイミニーヤ・ウパニシャッド・ブラーフマナ』（Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa [JUB]）である。ヴェーダ祭式の歌詠部門（サーマ･ヴェーダ）に所属するジャイミニーヤ派の文献として，祭式歌詠（サーマン）に関する哲学的な思弁を主な内容としている。JUB は，先行するブラーフマナ文献のように個々の祭式や歌詠を具体的に記述することはほとんどなく，祭式や歌詠をめぐって，あるいはそれらを離れて，再生説を含むさまざまな哲学的思弁を展開している。同じくサーマ･ヴェーダ所属のカウトゥマ・ラーナーヤニーヤ派の『チャーンドーギヤ・ウパニシャッド』と，テキストと内容において近い関係にある。ジャイミニイヤ派内ではウパニシャッドとして扱われているが，ヴェーダの学派伝統の外にあってウパニシャッドを聖典として奉じる後世のヴェーダーンタ学派からは，『ケーナ・ウパニシャッド』の部分（JUB 4.10.1–4 [4.18–21]）を除いてウパニシャッドとは見なされなかった。この文献がヴェーダの文献成立史の中で最初のウパニシャッドとしてどのように生まれてきたか，その誕生の全体像を描くことが本稿の目的である。そのために，以下の論点について順に考察していく。

1. この文献は何を中心テーマとしているのか。
2. それ以前の文献ではその中心テーマは扱われていたのか，いなかったのか。
3. この文献がそれを中心テーマとする背景はなにか。
4. この文献はその中心テーマからどのような思想を展開したのか。
5. この文献を作り出したのがなぜこの学派（ジャイミニーヤ派）であったのか。
6. この文献を最初のウパニシャッドと見なしうる根拠は何か。


**キーワード**：ウパニシャッド，ジャイミニーヤ，チャーンドーギヤ，ガーヤトラ，サーマン


## Abstract

The Upaniṣads are philosophical texts produced in the Veda, a huge complex of ancient Indian ritual texts. The Jaiminīya-Upaniṣad-Brāhmaṇa [JUB] is the earliest of the texts which were produced as Upaniṣads in the history of Vedic literature. The JUB as a text belonging to the Jaiminīya school of the Sāmaveda, 'the knowledge (*veda*) of sacred ritual chants (*sāman*)' has philosophical speculations about the ritual chants as its main contents. Unlike the preceding Brāhmaṇa texts, this text does not describe the details of the rituals and chants, but extends various philosophies including rebirth theories, in connection with, or apart from, the ritual and chants. It has a close relationship in texts and contents with the Chāndogya-Upaniṣad belonging to the Kauthuma-Rāṇāyanīya school of the Sāmaveda. Though the JUB has been treated as an Upaniṣad inside the Jaiminīya school, it has not been acknowledged to be an Upaniṣad proper by the Vedāntins who, being outside the Vedic schools, worship the Upaniṣads as their highest authority, with the exception of the Kena-Upaniṣad portion (JUB 4.10.1–4 [4.18–21]). The purpose of this article is to elucidate the overall picture of the birth of the JUB as the first Upaniṣad in the history of Vedic texts. For this purpose, the following points will be discussed:

1. What is the main theme of the JUB?
2. Is the main theme of the JUB treated in its proceeding texts or not?
3. What is the background for the main theme of the JUB?
4. What kind of philosophies does the JUB develop from the main theme?
5. Why did the Jaiminīya school, not other schools, produce the JUB?
6. What are the gounds and criteria for judging the JUB as the first Upaniṣad?


**Keywords**: Upaniṣad, Jaiminīya, Chāndogya, gāyatra, sāman